

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和七年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第五号（通卷二八一号）

万象

B A N S Y O

八月号

2025. 8



八月の句

初秋の蝗つかめば柔かき

芥川龍之介

立秋を過ぎても厳しい暑さは続くのだが、日差しの色や吹き過ぎる風と木々の佇まい、そして街中の情景等にもふと秋を感じる。そういう頃の句である。

草に止まっている蝗が目にとまり、ふいと手を伸ばしてみた。つかんだ蝗の思いがけない柔らかさにはっと衝撃を受けたのだ。初秋という季語のもつ情趣と共に、手の中の蝗のうら若さも見えてくるし、驚きの鼓動をも共感できる句である。

芥川龍之介の生涯の句数は、1014句と村山古郷によって確認されており、明治、大正の作家の句作では最も佳句の多い一人という吉田精一の芥川龍之介全集での評価もある。

(鈴木波江)

令和七年

八月号

万象

BANSYO

幸福になれるかどうかは、
この程度でちょうどいい、
と思えるかどうかにある。

篠田桃紅（書家）

（「二〇三歳になってわかったこと」より）

万 象

令和7年8月号

主宰作品 窓 若葉 江見 悦子 4

万象の窓^④ 輪島の段駄羅 江見 悦子 5

名誉顧問作品 定 家 葛 小林 愛子 6

風 音 集

風音散歩^③ (八月号) 小林 愛子 10

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

同人作品

江見悦子選 11

同人作品の佳句 江見悦子選 31

同人会だより

幹事会報告 内田 郁代 32

6月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

「中山純子記念俳句賞」の終了について 中條 睦子 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞 (六月号) 榎本 文代 34

同人特別作品

古き良き町 内田 郁代 36
火 縄 銃 草間三香子 37

特別作品評 (六月号) 編集部 38

私のこの一句 内田 郁代・大村 峰子・大内佐奈枝 39

第二十三回「万象」新人賞発表

新人賞受賞作品

新人賞の選考経過・選考委員の感想

北から南から 糸取りの里(福井)

珈琲ぶれいく⁶³続・風のしをり²⁰ 子規と私(七)万葉の抒情²⁴ 『万葉集』にたずねる抒情の源流²⁴

万象ノオト「電話」

万象作品

江見悦子選

薄荷飴日月譚(不定期掲載) 帯坂に山車押す脛の力瘤

万象作品の佳句

新中央句会報(5月例会)

ルビーの小函(八月号)

東西南北

万象俳句会 40

江見悦子選 41

事務局 42

中村 優 46

編集部 47

橋本 清 48

松井 宣夫・藤本 節子・中山 宜 49

横井 一美・清水英理子・八代 洋子 50

中村 千久 52

中村 千久 63

江見 悦子 64

編集部・校正担当 66

編集部・校正担当 69

東西南北 70

窓若葉

江見悦子

(主宰)

鳥語降る朝たのしきアマリリス
路のすぢ掌にふんはりとひとつかね
滝音のたがへり水分石を越え
初夏の山水走りおろし蕎麦
家刀鳩山邸二句自の古裂のてちやう窓若葉
緑蔭の陶椅子に人待ちてをり
ダチュラ咲くぬか雨の夜のジャズピアノ

輪島の段駄羅

江 見 悦 子

4月10日の日本経済新聞のコラム「春秋」に、「段駄羅」という言葉遊びの文化が紹介されていました。「奥能登の輪島市の庶民文芸」という説明に心惹かれ、この一文を書いています。木村功著の「不思議な日本語 段駄羅」によれば、段駄羅とは「能登の輪島で漆塗職人の仕事場を中心に、かつて大流行した短詩型文芸で、言葉の二重構造を楽しむ言葉遊び」とあります。

一例を挙げると 甘党は ようかんがえて 置く碁石

甘党は 羊羹が得手／よう考えて 置く碁石

中七の平仮名部分が、同じ読み方の「羊羹が得手」「よう考えて」と、意味の異なる二通りの言葉に分解され変身します。意味が乖離すれば乖離するほど評価が高くなるそうです。

俳句と同じ十七音ですが、中七音が、二つの異なる意味を持って上五と下五につながるもので、中七の「転換の妙」を味わい、「言葉の二重構造」の面白さが楽しめます。

座職である輪島塗の手仕事の場では、職人さんたちが頭を働かす余裕が十分にあります。むしろ沈黙考して作句に浸った方が長時間の仕事に堪えられます。肩の凝らない娯楽として、江戸後期以降、輪島塗の販路拡大に伴って発展した伝承文芸のようです。

例句をいくつか紹介します。

最南端 波照間島だ／果てるまじ、また 次の旅

寝苦しい 不快な蚊なり／深い仲なり 花と蝶

故郷で 鮭も産卵／酒も散乱 宴会後

キリコ見て 寄るの？窓岩／夜の円居は 輪島崎

ジャズ喫茶 サキソホン乗り／咲きそ、ほんのり 梅の花

約束事の縛りの中で、自由闊達に遊んでいます。北前船の拠点であった輪島の高い文化に驚きます。「輪島段駄羅同好会」が活動していた時代を過ぎ、能登半島地震・能登豪雨のあとの現在、状況は如何でしょうか。街も段駄羅文化も、一日も早い復興が成りますように。

定家葛

小林 愛子

(名譽顧問)

定家葛 渾身の香を放ちけり
木の椅子に沈みぬ万の薔薇の中
乳母車に犬の甘える薔薇の門
目の端に浮棧橋や夏料理
枇杷食べて種をこつんと皿の上
三つ切りの百足虫や生きて跳び付ける
おしやべりに夢中なりしを黒揚羽

六 義 園

中村 千久

(編集人)

嫩葉まで吸ひ上げられし地の湿り
夏落葉積みしかたへに竹箒
水落ちて病葉の淵うごきけり
老鶯のこゑ道連れに六義園
星涼しアルハンブラのアラベスク
氷島の白夜に酌みし白ワイン

母 の 日

福島 せいぎ

(顧問)

母の日の母の簞笥の引けば鳴る
海亀に灯台の灯のめぐりくる
浮人形ネパールの子が鳴らしけり
いくさなき干潟を跳べり鯉五郎
モンローのほつぺにはくろ夏の蝶
ふるさとの山へ草笛強く吹く

穀 象

柳澤 宗正

(顧問)

米櫃の底を穀象這ひまはる
川幅を余さず帯の青みどろ
町なかに空き地の増えて小判草
館より洩れ来る詩吟さみだるる
空席の無き図書館や梅雨に入る
見て真似て茅の輪をくぐる異邦人

燕 子 花

中條 睦子

(同人会会長)

梅は実にこのごろ狸来なくなり
青葉冷え膝抱いて切る足の爪
裸の子ひとり海へ走り出す
万緑や餌乞ふ猿のたなごころ
曲水の朝のきらめき燕子花
神官の泉汲み上ぐ長柄杓

はまなす

松原智津子

(北海道)

跡継ぎの野良着花柄芒種かな
灯台へはまなすの咲く一本道
風孕み葉柳水漬く鯉の池
空木咲き父の命日薄曇り
散歩疲れ榆の緑蔭去りがたし

菖蒲園

亀田やす子

(栃木)

川分かるる辺りほうたる右ひだり
植ゑし田の足跡小さし学校田
白うさぎ紐に引き連れ菖蒲園
天満宮の青梅ひとつポケットに
沼まぶし泰山木の花の反り

天道虫

沢辺たけし

(千葉)

さざ波に緑濃かりき余り苗
甘藍の外葉おほきく日を吸へり
馬柵走る天道虫の迅さかな
両の手で包めど洩るる螢の火
方一町梅檀の花匂ひけり

つばめの子

吉中愛子

(東京)

鏡涼し鞆あれこれ持ち替へて
子つばめの落とす真珠の糞一つ
二拍子に息継ぎ桐の咲く丘へ
堰切つて水より迅しあめんほう
梅酒漬け年代物と並べ置く

合歡の花

榎本文代

(神奈川)

筍の天ぷら食めば母のこと
緑蔭に見せ合うてゐる万歩計
青鷺の一步進みて日暮れけり
ずつしりと膝の赤子や梅雨に入る
廃校の門閉ざされて合歡の花

富士近し

神田美穂子

(静岡)

街川の水の匂へる卯月かな
ブロンズの少女へ薔薇の匂ひけり
河骨のきはやかな黄をぐいと上げ
はればれと素足よろこぶ板間かな
桐の花雲居隠るる富士近し

楊貴妃桜

井村和子

(石川)

千枚田植う震災のボランティア
夕づつや楊貴妃桜ほろと落つ
経師屋に隣る畳屋葎すだれ
里山に露人の墓碑や木下闇
嫁ぐ娘と月下美人の夜を語る

対馬丸会館・小桜の塔 前田貴美子

(沖縄)

会ひに來たよ若夏の海君らの海
小桜の子らよ涼しき眼差し
おはじきの遺品ひと色桜の実
浜木綿や対馬丸てふ船棺
母の日の雨の近道小桜碑

風音散歩

③③

(八月号)

小林愛子

青葉冷え膝抱いて切る足の爪 中條睦子

「青葉」は初夏の若葉が生い茂って、青青とした生気をみなぎらしているさま。青葉若葉は濃淡さまじまの緑葉のまじった様を言う。〈夜学教師に青葉ひしめくコップの水 綾子〉。掲句は爪を切るのだという。青葉の深緑には、冷え冷えと感じられる日もあるに違いない。「膝抱いて」が眼目である。このポーズは老人には出来ない。青葉冷えの下にやわらかく膝をかきいだく姿は、なまめかしくさえある。

タづつや楊貴妃桜ほろと落つ 井村和子

花と言えば桜のことであり、国花とされている。爛漫と咲き盛った花の散り際のあわただしさが、ひとしお哀惜される種類も多いが、場所によって名のある桜の一つに、奈良興福寺の楊貴妃桜がある。唐の玄宗の妃で叙事詩「長恨歌」に歌われた。掲句の桜には「タづつ」がよく合う。宵の明星の中で「ほろと落つ」は妃の最期が思われ、暗示的である。

甘藍の外葉おほきく日を吸へり 沢辺たけし

「甘藍」はアブラナ科の一年または二年生葉菜。広い畑に一面に植えられている。外葉は大きく濃い緑を広げる。

私たちは免疫力アップのために野菜のファイトケミカル、外敵から身を守るための植物の防衛手段、を利用している。「おほきく日を」吸った外葉の濃い緑はβカロテンが最も豊富、動けない植物の、活性酸素との戦いの果ての姿である。

子つばめの落とす真珠の糞一つ 吉中愛子

軒先などにつばめの卵が孵ると家主は勿論、行きずりの人もみな振り仰ぐ。愛らしくもあり、危なっかしくもあるのだ。「真珠の糞一つ」の思い切った取合わせで、句は生き生きと立ち上がる。「豚に真珠」ならぬ「糞に真珠」と大真面目である。多分一番子であろうが愛情いっぱい句である。

灯台へはまなすの咲く一本道 松原智津子

「はまなす」はバラ科の落葉低木。北海道や東北地方の砂地に群生、剛毛と棘が多く、数少ない日本原産のバラの一つ。「はまなすの咲く一本道」とあるので広大な面積であるに分かる。道の先は茂みに隠れ、一面に紅色の花の芳香で噓せかえる。白い灯台、青い海と空、あこがれの風景である。

白うさぎ紐で引き来る花菖蒲 亀田やす子

珍しい風景である。白兔を「紐で引き来る」というのは仔犬を引くような感覚なのだろうか。近頃は病人や老人が動物の力に癒しを求めることが多いが、兎もその一つではある。花菖蒲の花びらはやさしい。兎を連れてやってきた主人公は、果たしてご老人であったろうか、子供であったろうか。

同人作品



江見悦子選

札幌 岡本敬子

入植の裔は一戸や村おぼろ
菜の花へおとぎの国の電車来る
かそけしや華奢な原種のチューリップ
早蕨のまこと赤子の拳ほど
はくれんの眩しき白と翳る白

札幌 林陽子

花冷や母へ最期の紅をさす
通夜果てし臘月夜へ二歩三歩
ゆらめきて母居る気配春ともし
昨夜の雨やどれる百のチューリップ
はつ夏や風やはらかき千木の空

札幌 落合裕子

風を呼び風と遊べり糸柳
夕桜百歩に満たぬ万歩計
チューリップ咲き継ぐ先に友の家
どの花も盛りと蝦夷の春惜しむ
子供の日太陽覗く天文台

札幌 濱谷和代

伏流水あふるる裾野木の芽風

一斉に駒草返る牧場かな
玉砂利の落花を浚ふつむじ風
マーカールの増ゆる教科書花は葉に
万緑や獣医学部へペダル漕ぐ

札幌 大内和憲

百度石の天辺光る青葉光
リラ冷や酸素の泡のとぎれなき
草ロールころがし運ぶ今朝の夏
まひまひの雨後の光にふためけり
草丈の馬^{うま}柵を越すや聖五月

札幌 紅露恵子

少年のサッカードリブル春疾風
春入り日送電線は銀色に
ふらここに小さき揺れある夕まぐれ
朝桜^{さくら}蕾^{つぼみ}に宿す雨雫
少年のおとがひ尖る立夏かな

札幌 大内マキ子

牧舎みな窓開け放ち青田風
岩ひばり沼面に雲の影迅し
影絵めく牧牛牧馬海霧の中

夏蕨長くる横穴古墳あと
海光へ開く蔵窓夏つばめ

札幌 中鉢弘一

太鼓橋くぐりて解ける花筏
隠沼の蘆辺に寄する花の塵
沼の口塞ぐ青蘆背丈ほど
水草の根縫うて尻振る通し鴨
石噛みて根付きし谷の山桜

札幌 北浦詩子

七色に空に踊れる石鯨玉
丁寧にひげ取るもやし暮遅し
花冷やインクの詰まる万年筆
魚河岸に大漁旗と鯉幟
昨夜の雨残る若葉の眩しさよ

札幌 谷廣司

紅梅の紅の薄れや休暇果て
蝦夷紫躑躅夕日に色増せり
むらさきに烟る恵庭岳や夏始
揺れもせでハンカチの花幾百枚
幹八分朽ちてなほ咲く藤大樹

江別 佐藤 哲

木洩れ日の屯田墓地や福寿草
丹頂に逢ひしよ里は深ねむり
栗鼠駆くる音乾きたり雪解山
雪割れば鉄にこつんと古葉つ葉
山峡に竿一本や幟立つ
雪解野に触れて色増す夕日かな

江別 太田 佳美

白樺の仕切る畑を青葉風
ライラック祭りに満つる香を愛でて
定山溪渡る幟に湯のけむり
子供の日恐竜展の大卵
木蓮の白際立てる蝦夷の晴れ

新潟 高橋 ひろ

夕虹や土に屈まる老農婦
濃く淹れて古茶ならではの筒茶碗
何となく摘み小判草耳もとへ
泣き虫で笑顔は父似武具かざる
大声で泣かれて写真初節句

新潟 高野 松風

広広と植田明りになりにつけり
初蝶の風波のごと畝過る
釣人の竿たたみみる蝶の昼
花筏ゆつくりと歩を合はせたり
早蕨や沿ふ土手裾にひとにぎり

益子 光岡 れい子

大庇下見に来るつばくらめ
女坂うすむらさきに著莪の雨
若葉風ビート烈しきジャムセツション
麦の風ほほにペダルを思ひ切り
歌舞伎果て薄暑楽しき銀座かな

芳賀 大村 かし子

そよ風に枝先重き八重桜
新築を言祝ぎ香る胡蝶蘭
葉桜の影落としたる堤かな
門口のポストを覆ふ山つつじ
L R T 走る両側像の花

※LRT……次世代型路面電車
宇都宮 阿久津 勝利

蒲公英の絮飛ぶ畦は風の道

百頭の羊の毛刈る新樹光
公害の直訴の川や蘆の角
被災地の花咲き満つる並木かな
青空と棚田を繋ぐ初つばめ

栃木 上岡 佳子

園児らの手形ぺたぺた鯉のぼり
葉柳の影に棹さす舟下り
ゆるやかな麦の穂波や里暮るる
三龜路や小檜若葉のきらきらと
えごの花窓辺の席に予約札

佐野 増田 幸子

ゆく春のゆふぐれは水さざめきぬ
母の日や鷺の白きが裏川に
晴れきつて赤松の芯ひよろりかな
小満や目薬さすに口あけて
亀の子の甲羅にうすき泥砂かな

佐野 加藤 季代

牡丹へ閻魔堂の扉放たれて
梅雨兆す緋の鮮やかに鯉の群れ
噴水の思はぬときの伸び縮み

揚羽蝶眩しき空へ見失ふ
夏落葉土に馴染まぬもの多し

佐野 阿部 澄

丸まりて家鴨の眠る若葉風
雛罌粟のうつ向く蒼風を聞く
ひらひらと揺るるほかなきポピーかな
又戻る友の話や桐の花
腕に来て刺すほどでなし五月の蚊

佐野 芝宮留美子

花りんご浮野の里の構へ堀
豆腐屋の豆炊く匂ひ花は葉に
新樹光崖をそびらに弁天堂
青葉山已年開扉の弁財天
和蘭芥子長けて水辺の盛り上る

佐野 島田 和枝

弁天堂青葉若葉に埋もるる
余花散るや段々畑に惜しみなく
花の下よちよちの児の縄電車
ふる里は山また山や夏に入る
雛罌粟や一日二本のローカル線

佐野 野 緑

凹凸の書き順復習ふ臘月
粃蒔や一族郎党握り食ぶ
今日立夏朴葉味噌の香本家まで
連れ立ちて風穴覗く青葉山
大麦の金の穂波の寄せ来る

佐野 店 網 洋 子

工場の壁這ひのぼる蔦若葉
PK戦果てグラウンドへ花吹雪
母の鬼探す幼子さくらの実
夏草にごろり釣り師の横たはる
山路行く夫の鼻唄若葉風

足利 大 木 茂

火球吹くガラス工房緑さす
巖頭の荒き褶曲松の芯
画廊出て銀座柳の雨となり
赤城嶺の空青青と茄子植うる
市境はトンネルの中夏来る

土油 澤 照 枝

夏場所や夕空に鳴る跳ね太鼓

バス降りて筑波山を仰ぐ登山帽
山々の新緑色を重ね合ひ
母屋より漏るる人声花うばら
昼暗き山路に迷ふ若葉寒

加須 茂 木 弘 子

孔雀見にふはりと藍の春シヨール
せせらぎや春田に仰ぐ弁天堂
屋敷墓の一基はクルス竹落葉
たかなや一揆に遭ひし蔵の裏
青楓青き水面へ青重ね

さいなま 山 本 右 近

動き出しさうなマネキン夏はじめ
玻璃越しの抜き身の太刀や青葉寒
湧水の砂噴きあげて水草生ふ
初夏の池大鯉おのが影の上
瀬戸内を跨ぐ大橋さつき波

所沢 三 好 か ほ る

青嵐三角屋根に避雷針
若楓下の木椅子の固さかな
水やりの朝な夕なの矢車草

余花の雨ご朱印帳の墨にじむ
旅人のリュックに挿せる山の路

所沢 南 雲 秀 子

鶯の音に囃されて畑仕事
大つつじの枝を潜りて宮参り
退院の知らせ届くや柿若葉
マロニエの花の並木をランドセル
境内に残る土俵や新樹光

千葉 田 中 道 江

胸に置く本すべり落つ鳥雲に
大寺の廂をかすめ鳥つるむ
せせらぎの青葉の影のゆらぎかな
橋桁に小さき渦あり桜の実
晶子歌碑めぐる庭園夏の蝶

千葉 松 浦 陵 保

縦横に規則正しく植田かな
大きな音たてて地に降る夏落葉
風吹けば次つぎ零れ柿の花
丁寧に土を肥して茄子植うる
手料理で持て成す端午の節句かな

万緑の森に弦楽五重奏
千 葉 喜 多 恭 仁 子

教皇逝く戦禍の止まぬままの夏
戸定邸湯殿に満つる新樹光
ピースてふ夫の遺愛の薔薇満開
雨上がり門扉に張り付くなめくじり

千葉 大 月 玲 子

囀やうからはらから遠くなり
飛ぶ決意までの羽搏きつばめの子
小満の水ほとばしる龍の口
ここだけの話と言うて新茶汲む
ハーブの香どこへも行かぬ春の昼

千葉 竹 澤 竹 里

一山は青葉若葉のグラデーション
はや伸びて天を突き刺す今年竹
飛魚や富士を横目にひとつ飛び
魚屋に並ぶ飛魚羽拡ぐ
蛙載せ田水を亀の泳ぎたる
みつ豆やそれからねと声前のめり

佐 倉 大 内 佐 奈 枝

竹の秋丸太積まるる寺普請
吾が名書く寄進瓦や椎若葉
農具市並ぶるだけの無愛想
田の隅は三つ指で挿す田植人

佐倉 三屋 英 俊

炙られて縮む錫や桜冷え
ときめきの名や惜春の古日記
炬に揺るる釣釜に春惜しみけり
遠富士や流れ見下ろす夏座敷
涼しさや欄間に蝶の透彫

佐倉 横川 良 子

椎匂ふソーダ硝子の窓ごしに
連れ立ちて茅門潜る夏帽子
住み旧りし家守るごと桐の花
前を向く卒寿の画伯樟若葉
腰板の隙間に覗く夏の草

四街道 奥 太 雅

通り抜け無用の路地や葱坊主
侮れぬ春の落葉の嵩を掃く
樹の下に降るものあまた若葉時

大屋根の樋の緑青松の芯
嘴に玩ばれし蜥蜴の子

四街道 塗 木 翠 雲

山の辺の山藤藍を滴らす
母の日やチラシの裏に母の文字
田水張る一縷の水も余さずに
下 総 の 空 翻 る 夏 燕
あめんぼの水を凹ませ飛びにけり

船橋 山下 良 江

風ひかる空まつ青な戸定邸
戸定邸春禽の声溢れ出て
甲冑の親子胸張る若葉風
坂下り若葉の杜をふり返る
遠くより鉄橋越えて青葉風

船橋 赤 堀 洋 子

卷きひげを頼みに風のスイートピー
茅の穂夕日と風に揉まれたる
大きな葉に小さく咲ける柿の花
公園の日向を舞つて蝶の恋
花に触れ香り楽しむ薔薇の門

船橋 久保村 淑子

翡翠の川面をにらみ固まれり
捨畑の隅に明るし花あやめ
プランターの下に潜める青蛙
観音像に一筋絡む蔦青葉
使者の間や柏若葉のつやつやと

船橋 片桐 帆一

春落葉母と子だけの砂場かな
瘦せの身のほのほの酔へり麦焼酎
病葉のはなやぎ落つる心字池
古帽のひさしの奥に薔薇見る目
粒ほどの花心にひかり薔薇真紅

船橋 宮本 加津代

雨音の夢の中なる四葩かな
晩年は病歴ばかり更衣
蒲公英の綿毛の小気味よく離れ
いく筋も日矢射す風の新樹かな
噴水や子等入れかはり立ちかはり

船橋 中嶋 久登

用水の速さそのまま田水引く

離陸機と並び泳ぐや鯉鱗

鶏の一声震へ南吹く

乳菌生え変はる八十八夜かな
田植の子顔に手足に泥うれし

柏 山本とく江

手術待つ夫へ急げり余花の雨

松の芯しなやかに立つ戸定邸

石仏を隠してゐたり萩若葉

坂川の静かさに散る柿の花

万緑の中より小鳩こぼれけり

柏 内田 郁代

仏壇を満たせり青き新茶の香

川風に朝日にひかるてんと虫

黒鯛一尾買うて夕餉に持て余す

芍薬の真白や妣の誕生日

との曇る空を拡ぐるえごの花

柏 古川 京子

しばらくは堰にためらひ花筏

貝塚の名残の岸辺棕櫚咲けり

龍の吐く水のきほひや羊齒若葉

戸定邸初夏の富士山雲隠れ
水音に隠れてゐたり白菖蒲

流山 穂 刈 照 子

流されず流れ変へゆく落椿
影生まれ風音生まれ花は葉に
柿の花青き葉影の明るさに
坂川のひかり吸ひ上げ棕櫚の花
若葉風戸定が丘をふくらませ
大空を雲雀の声の溢れ出す

東京 名 和 政 代

昭和の日ウルトラマンは風呂敷で
賀茂祭糺の森の昼休み
揚窓の明治の館棕櫚の花
緑蔭にガイドの列を遣り過ぐす
滴りに白杵石仏おはします

東京 藤 田 裕 子

道ますぐ右も左も花りんご
家裏に残雪なほも信濃なる
雪囲解きし僧坊水の音
薫風や補助輪取れしりボンの子

闊歩する銀座通りや薄暑光

東京 島 野 ひ さ

母の日の花束チューリップばかり
雨あとの回らぬ水車虹立てり
御無沙汰のおわびの新茶娘より
早稲田行都電の窓に額の花
葉桜やみんなきてゐるこの広場

東京 加 賀 葉 子

日のなかに新樹さはさは日を返し
三猿の石像の陰青蜥蜴
青芝に眠る男や靴揃へ
蓮巻葉薔より細く立ち上がる
にぎり水澄む静けさの植田かな

東京 久 留 島 規 子

石楠花の雨に艶めく真くれなる
のんこうの茶碗にまみゆ暮の春
連休の街はしづかに夏立てり
朝の風抜けて蜜柑の花かをる
旅に出る夫や五月の霧晴れて

東京 下 嶽 孝 一

釣り上ぐる獲物春光もろともに
虫出しの雷のあそべり遊水地
コンビニの傘立に杖花疲
振り向けばまた色深む夕牡丹
天の風吐かせて仕舞ふ鯉のほり

東京 草 間 三 香 子

葉桜の風や遅刻の子の走る
廃屋を閉ざす鉄扉や柿の花
列をなし上る小蟻や力石
歩道橋越えてゆさゆさ今年竹
成人となりし子を待つ端午かな

東京 岡 村 純 子

葉桜の光を散らし鯉の群れ
揚羽蝶風を乗り越え空の奥
安靜の続く病窓若葉風
母の日の花を仏の母と分け
子の発ちて飾兜の残る部屋
はつ夏や亀のつたりと石のうへ

東京 桑 原 優 美 子

母の日の掃除ロボット稼働中
閑取の行き交ふ街の薄暑かな
葉桜の影の生まるる葉のそよぎ
地下鉄を出づれば祭囃子かな

東京 三 村 紀 子

密やかにまたたく小夜の植田かな
青菫朶を濡らし流れの速まりぬ
新緑の溢れ明治の煉瓦塀
飛石の間を自在にあめんほう
夏蝶の青の横切る茶庭かな

東京 小 池 清 晴

枇杷一つ五百円也日本橋
路を剥く指先灰汁に染まりけり
浜離宮囲むビル群松の芯
葉桜やジャングルジムの取壊し
エアコンの陰より窓へ蜘蛛の道
薔薇の芽やカリヨン遠く時を告げ
稜線に月の滴る朧かな
碾臼に深きかすがひ亀鳴けり

東京 一 由 久 美 子

天秤の針揺れてゐる昭和の日
しなやかな風のかたちに白牡丹

武蔵野 砂地 宏子

樟若葉双子抱きて宮参り
四阿に老鶯の声数へけり
夏蝶の瑠璃きらめかせ藪を出づ
夏蝶と上り行く道峠路
六義園森の涼しき風吹けり

立川 正田 華子

交番に頭薙く燕の子
カーネーション兄と妹の小買物
夏蝶の野川を越ゆる力かな
神の森夏鶯の妻恋ふる
松が枝の益荒男ぶりや大西日

町田 広瀬 俊雄

鬼やんま翅音の高く沼の上
強風や大地のうねる麦の秋
山畑の蚕豆の花盛りたる
ネモフィラの溢るるばかり空の色
青鷺の日がな一日一本脚

町田 桔梗 純

芝庭のかたばみの黄のほしいまま
荒庭の手入れ果てなし柏餅
コンクラベの煙白とや若葉風
蚕豆を莢ごと焼きてほの甘し
時鳥洗濯物を干しをれば

日野 喜多尾 明子

万緑や宇宙の数式黒板に
若夏の公園双子の乳母車
青空へ栃の花立つバス通り
芍薬のどつと咲き早やくたびれぬ
文したたむ夕べをしきり遠郭公

横浜 西本 才子

パレードの太鼓とどろく街薄暑
産土に日の丸憲法記念の日
ひと跳びに畦を越えたり雨蛙
堰落つる水輝きて夏来る
緑蔭に寝息のひくく乳母車

横浜 大橋 雅子

受診終へ院出る一步風薫る

雨戸繰ればほのと香れる花蜜柑
露を刈る時折腰を伸ばしつつ
灰汁の指子等好物の露を煮る
園児らの揃ひの帽子若葉道

横浜 田 賀 榎 恵

どくだみの花いきいきと雨ひと日
ゆすらの実熟れてまつ赤を頬ばりぬ
しろじろと暮れ道端の姫女苑
母の忌や庭に真白き海芋咲く
父母の墓矢車草をひと摺み

横浜 三 木 豊 子

藍色のガラス小鉢に冷奴
紅さしてオーデコロンを耳朶に
抱き上げし稚の万歳風薫る
連休の街の静けさ夏燕
藍染の香り残りぬ夏のれん

横浜 星 野 信 子

夏来る土産の菓子に洋酒の香
旗の立つたまごサンドやこどもの日
耳朶の大きな妊婦若葉風

公園に木の椅子と卓夕薄暑
花柄の縦長コップ昭和の日

川崎 大久保 進

地方紙に桜の便り旅の宿

湯上りのコーヒー牛乳昭和の日

夏めくや野菜のをどる中華鍋

武器飾る別けても美しき太刀の反り

工作の竿は割り箸鯉のぼり

麦秋や食べてはこぼすパンの屑

鎌倉 恒 川 清 爾

散髪を終ふれば雨の立夏かな

倭の国の金印小さし村薄暑

母の日やいつしか妻も母に似て

海峡に光る鉄橋夏つばめ

明易や壁の日捲り三日前

伊勢原 佐 藤 和 子

神主に軽き会釈や若楓

葉桜の中夕月のレモン色

雨一と日薔薇の蕾の真くれなゐ

朴咲くや朝靄除除にうすれゆく

しろじろと雨の夜明けの山法師

静岡 大村 峰子

列なして赤石岳へ柳絮飛ぶ
野に戻りさうな畑やたんぼは黄
今年又ポストへ続く蟻の道
新緑の匂ひをつけて犬戻る
たんぼの絮のまんまる昼の月

静岡 海野 みち子

逝かれたる師の句碑巡る蝶の昼
出し抜けに雉子の羽音や行者径
目の合ひて小鹿寄り来る峠道
水温む鋤鎌洗ふ外流し
トーマスのトロッコ列車山笑ふ

静岡 宮崎 知恵美

茶の芽立ち畑の色を一新す
紋付の裾濡らす雨 春祭
白蝶の付いて来てゐる墓の道
花冷や通夜の帰りを独り待つ
信号待ち桜吹雪に出逢ひたり

静岡 望月 敏男

春風につむじの辺り撫でらるる
春風や足で喜ぶ赤ん坊
ドア開き一駅毎の木の芽風
画架を組む丘にほつほつ土筆かな
競り終へて隅隅洗ふ蜆舟

静岡 藤原 千代子

釣竿を三本垂らし日永かな
弁当は助六と決め花巡り
堰に来て色重ねたり花筏
足音のやうに散り出す春落葉
巢立鳥振り返りつつ畝越ゆる

静岡 荻野 加壽子

初蝶へ日溜りの席譲りけり
咲き満ちて躑躅は影を失へり
一木に風のふくらみ聖五月
男傘借りて古書街修司の忌
命にも値段憲法記念の日

静岡 小川 明美

縦横に薬師に走る罅残花

みみず文字のメモや蛙の目借時
どの道を選りてもけふは昭和の日
木洩れ日やブロンズ像の膝に蠅
図書館の背山古墳の草むしり

静岡 藤本 節子

花時計の長針の影春深し
大腿で追ひ抜く少女夏来る
薫風や白の眩しきユニフォーム
薄ら日の中や白濃き一輪車
溢れ出す画帳のみどり風五月

静岡 大長 文昭

掻き分けて浦島草の髭探す
傾ぎある名主の墓や諸葛菜
ニュートンの林檎の芽吹く工学部
総髪の新雪像へ若葉風
黒揚羽過れる耶蘇の十字墓

静岡 加山 ひさ子

足早の肩滑り落つ春シヨール
ふらここを下り平らかな地球かな
駆くる子の水筒をどる大夏野

鑑真忌鼻をくすぐる畳の香
春燈や茶町を抜けて呉服町
てらてらと風にあらがふ柿若葉

静岡 石川 裕子

掃き寄する箒に重き花の塵
花あやめ掃き出し窓を額縁に
朝の戸を繰るや実梅のぼろと落ち
ぼつかりとふたりの時間水羊羹
母の忌やサイダーの泡仏壇に

静岡 本多 ひとみ

反り返り斧振る構へ子蟪蛄
杣道に大瑠璃の声響きをり
手の甲に泥の乾きや代田搔く
応援の法被の背に輪取る汗
輪藏を涼しき風と廻したり

静岡 杉 澤 修

田の神を迎ふる朝の初蛙
山門の磴を打ちたる桜の実
昼蛙とぷんと跳ぬる草の陰
峠路の木洩れ日散らし竹落葉

花過ぎの茶畝に日差し積もりけり

射水 成瀬真紀子

初燕天地大きく使ひけり
ほうたんに触るれば風のぬくもりぬ
畦またぎ一山映る植田かな
母刀自へほど良き薄さ初鰹
夕暮の雀にぎやか胡瓜もみ

金沢 今越みち子

良寛の墓所一面のクローバー
気兼ねなき施設の個室初鰹
車椅子に御薄頂く若葉風
抹茶碗の泡美しや白牡丹
若楓の影へ移され車椅子

金沢 伊藤美音子

花ぐもり焙じ茶熱き香を放つ
ふつくりと日の匂ひして鼓草
激つ瀬の律の整ふ榛の花
鳥ごゑに清明の杜浅葱色
クレソンにときをり水がささやけり

金沢 高田たみ子

つつじ燃ゆ午後の境内鎮もりて
茶屋街へ裏径ぬくる薄暑かな
千年の櫟若葉や空真青
虎猫の厠横切る立夏かな
あちこちに実梅ころがる墓掃除

金沢 豊田高子

呼び合うて棚田七戸の田植笠
朝まだき青きしづくの茶を摘めり
田を植ゑて山河に風の生まれけり
肥立ち良き産後やあをき粽解く
押さへられ牛は立夏の地へ涎

金沢 松井佐枝子

檜の花露地を水打つ今日庵
白昼の祇園の辻に囀れり
山嶺の厠バケツに鬼薊
母の日の父ある夢に目覚めたり
薄暑なり煮沸ほこぼこジャムの瓶

金沢 石川純子

とんとんと影踏みの子や新樹光

サックスの音のびやかに若葉風
牡丹七日陶の狸のまん丸目
葉桜の影の斑踊る小径かな
向かひ合ひ途切れぬ会話新茶汲む

金沢 河野 尚子

修復の鳥居掠めて初つばめ
初音かな護岸工事に紛れずに
轆轤挽く窓辺をよぎる揚羽蝶
鯉の吐く泡にくづるる花筏
復興をと威勢よく練る青柏祭

金沢 道場 啓子

線路跡に遺る枕木夕朧
廃線の傍春水の滔々と
日に一度の集配ポスト陽炎へり
はつなつや機影一線音のこし
解体の跡広々と若葉風

金沢 杉本 年虹

あらひ仏へそそぐ一掬糸桜
茶屋街の空斜交ひに燕来る
マンボ踊る赤きスカート養花天

城濠へかたぶく巨木亀鳴けり
長屋門出でて穀雨の石畳

金沢 南 恵子

朧夜や模型電車を走らせて
鈴懸の幹のまだらや風青き
新緑の匂ひあふるる茶碗市
青蔦を這はせ小唄の教習所
叱られて拗ねてゐる子やゆすらうめ

金沢 松下 信子

清明や銀輪続く川向う
母の忌や庭へ舞ひ込む花また花
行く春や墨書の余白美しき
春惜しむ一人汲む茶の芳しき
外へ一歩総身に浴ぶる若葉風

金沢 北川 禮子

代掻くや越の白嶺の髣髴し
足音に寸余の蝌蚪の散らばれり
父祖の山目印となる花辛夷
花は葉に母手を振りし駅廃れ
神饌の尾鰭反りたる桜鯛

金沢 清水英子

夏つばめ軽くて小さき旅鞆
青楓千段先の奥の院
キャンパスを丸ごと抱く若葉山
描きかけの石膏デッサン窓若葉
少年のくやし涙や柿若葉

内灘 塩井志津

その裾にタイムカプセル老桜
窓越しの万朶の花や受診待つ
加賀友禅流るるとき花筏
老鶯や城を望める九十九折
ゴンドラにサンタルチアを聴きし夏

七尾 谷渡末枝

若葉風授業参観窓越しに
原子炉の黙初夏の波頭
夕牡丹風の連れ去る一二片
全長を隠しきれずに草の蛇
老鶯や空の狭まる棚田径

白山 加藤美栄子

早苗饗や結ひの訛の飛び交ひて

田返しの一振りに驚舞ひ始む
豆腐屋の鈴の音せはし走り梅雨
行きずりの襟あし白し街薄暑
山肌に爺の張りつく木の芽搔き

敦賀 倉谷ます美

まだ温き甘茶を持ちて友来る
鳩の湖ベールにつつみ蠶れる
寄居虫や潮引く沖の鳥居みち
高野山下る参道化儼草売る
伊豆の蕎麦盆に山葵とおろし金

敦賀 鶴田勝子

坊守の百花ととのふ甘茶寺
風を切るターザンごつこみどりの日
仔馬跳ね背の縞模様くつきりと
山葵田や清流しぶく天城越え
寄居虫や芭蕉遊びし色ヶ浜

敦賀 中川雅月

雨催ひ畝に並ぶる接木苗
青天にランナー並ぶ弥生山
寄居虫の探す貝殻二度三度

勇壯な三叉四尖落し角
山葵田の溪流沿ひに根出しの葉

敦賀 中 村

優

寄居虫の小貝に紛れ茹であがる
「手術中」表示の消えぬ梅雨曇
氣に入らぬこと多きてふ虎魚の眼
皺深き漁師の金齒鬼おこぜ
一斉に庭木の唄ふ五月晴

敦賀 為永 香月 枝

安曇野の旨き湧水山葵沢
萱葺きの湖畔の湯宿雉子ほろろ
啼鳥の声色に艶弥生尽
曳山も花も佳境や城の昼
花時を違はずに来る妹かな

徳島 福島 吉 美

鳶職の屋根に身軽し木の芽風
葉山葵を魚籠に満たして父帰る
村中に張りし田水の溢れゐる
四月馬鹿米屋に米のなかりけり
輪唱のやつとそろへる花の昼

徳島 村上 和 義

水あげて河馬の欠伸や目借時
躍り口までの狭庭に実梅落つ
猫車押して水汲む島の夏
走り梅雨伝言板の文字乱れ
引き上げし網を飛び出す桜鯛

徳島 宮西 修 一

燕来る軒を貸したる散髪屋
封筒を振りて聞こゆる春の音
葉桜の木洩れ日浴びて車椅子
新緑の真つ只中にかづら橋
音立てて風車のまはる若葉山

徳島 平 岡 功

流れゆく雲に繋がる梨の花
踏青や母を連れ出す車椅子
葱坊主泣き虫今や大学生
囀や城山揺れて膨らみぬ
山吹の奥に水琴窟の音

石井 木内 マ ヤ

てらてらの作り物めく柿若葉

黒猫の小さき足あとふきのたう
薫風や今朝もお寺へ出勤し
トンネルの出口は見えず夏の霧
守宮の子両手に包み逃しやる

小松島 岡田あゆみ

アオザイの人の見上ぐる桜かな
チューリップあつけらかと散りにけり
武家屋敷ベンチの下のつくしんぼ
山道のこんな奥まで花の屑
神官の見上ぐる巣箱傾きぬ

福岡 宮田千恵子

春時雨めがねの端に小さき傷
水音も流れも草の芽吹きかな
散るさくら散るさくら皆空あふぐ
紅梅のパチリと咲いて退院す
蛇口よりぼちやりとはねて水ぬるむ

長崎 丸本祥夫

救命具ひび割れのまま春来る
パンの耳引つ張り合うて雀の子
満潮へ早や先駆けの花筏

とんがりの芽の緩びたり柴木蓮
新しき風に託せり春落葉

西海 山下敦子

カーテンを開くる楽しみ五月かな
万緑を風車の影の来ては過ぎ
袖にゐて出を待つごとく踊子草
南天の花に雨滴のひとつづつ
木洩れ日の上を歩むや夏始

宮崎 中山宣

巻紙の墨の太字に紙魚走る
白シヤツの袖のボタンの真二つ
泥はねて流筒馬二句昂る馬やさるすべり
まむし草関所を覆ふ薩摩郷
バス停は青田のまなか風生まる

宮崎 中山芳教

鴨帰る右岸左岸のビルの影
寝返りに枕の凹み余寒なほ
春の宵暮色蒼然尾鈴山
脳外科の看板巡り鳥交る
捨て舟に川波光り残る鴨

宮崎 鳥居達史

花は葉に猫の通へる供養塔
御幣立つ天領村の青田かな
葉桜のしづくに濡れて式部像
えごの花郵便バイクくぐり来る
夏野ゆく句友群れたる一处

那覇 中本

清

花伊集のうるしびかりや宵の雨
潮風に薊の棘の疼きかな
喉飴を舌にくるくる蝶の昼
踏青の踵に力風は辺戸
浜独活の吹かれつぷりも辺戸の果て

西原 宮城

勉

友のなき同人名簿鳥ぐもり
首里城の石段の艶夏来る
若夏やくるくるひかる仔山羊の尾
組み合ひし腕衰ふ復帰の日
山車のごと虫を曳きをり蟻の群

豊見城 渡真利真澄

子福者の話終はらぬ蜆汁

外にもるる機音の癖日永し
水鉢の水には寄らで糸とんぼ
ままごとの野花置かれし噴井かな
鉄臭き小銭で買へり氷水

ベルリン 鈴木波江

夕暮がゆつくりと来る鱒の池
アボカドの根が出て伸びて聖五月
庭に出て百歩の先の麦の秋
影さつと差して戻り来夏燕
村から村繋ぐ並木や新樹光



同人作品の佳句

江見悦子選

雪割れば鋏にこつんと古葉つ葉
 大声で泣かれて写真初節句
 小満や目薬さすに口あけて
 噴水の思はぬときの伸び縮み
 遠富士や流れ見下ろす夏座敷
 痩せの身のほのほの酔へり麦焼酎
 流されず流れ変へゆく落椿
 青菌朶を濡らし流れの速まりぬ
 芍薬のどつと咲き早やくたびれぬ
 耳朶の大きな妊婦若葉風
 夏めくや野菜のをどる中華鍋
 咲き満ちて躑躅は影を失へり
 鑑真忌鼻をくすぐる畳の香
 昼蛙とぷんと跳ぬる草の陰
 原子炉の黙初夏の波頭

佐藤 哲
 高橋ひろ
 増田幸子
 加藤季代
 三屋英俊
 片桐帆一
 穂苅照子
 三村紀子
 喜多尾明子
 星野信子
 大久保 進
 荻野加壽子
 加山ひさ子
 杉澤 修
 谷渡末枝

同人会だより

幹事会報告

内田郁代

5月27日、幹事の皆様のご参集を頂き、東京文化会館にて幹事会を開催しました。ご欠席の林陽子さんからは事前に意見書を頂き、総務の久留島規子さんにもご出席頂きました。主宰、会長のご挨拶に続き、会計より令和6年度収支決算報告があり、全会一致で承認されました。次いで本年度予算案が提出されましたが、検討すべき事案があり、秋の同人会総会前までに予算案の修正をする事になりました。また、オンライン同人句会についても、現況説明と意見交換があり、広く全国の会員の句を見る絶好の機会という意見に纏まりました。次いで、「中山純子記念俳句賞」について、実施の方法、継続の有効性など、多岐にわたって活発な議論がされました。結果は別途、中條会長よりご報告いたします。同人会費減額についても広く意見が交わされましたが、万象全体の問題としてワーキンググループで検討する事となりました。慶弔費の使途について、長寿祝は見送る事とし、弔事の際は供花として支出する事となりました。同人会役員の3年任期を2年に、という案は、退任は何ら制限されておらず、提案は否決され従来通りと致しました。

幹事会の議題審議のあと、中村千久編集長から、校正基準についてのお話も伺うことが出来ました。

忌憚のない意見交換が出来た有意義な一日でした。

6月の「万象」オンライン同人句会高地点

9	しなやかに風を織りゆく蜘蛛の糸	穂苅 照子(流山)
8	梅雨寒や古米古古米古古古米	山下 敦子(西海)
7	病葉の終の赫さや沖繩忌	荻野加藤子(静岡)
7	生れたての目高数ふる虫めがね	高野 松風(新潟)
5	牧の牛若葉の風を反芻す	古川 京子(柏)
5	源流へ一筋の滝立ち上がる	村上 和義(徳島)
5	ダチュラ咲くぬか雨の夜のジャズピアノ	江見 悦子(東京)
5	炙りよしたたきなほよし初鱈	大久保 進(川崎)
4	蟻の列お百度石へ来て乱れ	穂苅 照子(流山)
4	神輿来る来るぞと人の集ひ来る	下嶽 孝一(東京)
4	星涼しアルハンブラのアラベスク	中村 千久(志木)
4	行列の先に米あり走り梅雨	久留島規子(東京)
4	早苗饗や結びの訛の飛び交ひて	加藤美栄子(白山)
4	ひきがえる瞑想を解く泥の声	谷渡 末枝(七尾)
3	老一人宮古上布の初夏を織る	中川 雅月(敦賀)
3	でで虫や銀の軌跡を葉の裏に	山本 右近(さいたま)
3	閉校の軒の古果に燕来る	村上 和義(徳島)
3	はればれと素足よろこぶ板間かな	神田美穂子(静岡)
3	地下街のカレースタンド梅雨に入る	大久保 進(川崎)
3	白壁に欽立ち並ぶ芒種かな	一由久美子(東京)
3	まいまいや幼の手紙クイズ付き	喜多尾明子(日野)
3	卯波寄す万博の環の懸造	大木 茂(足利)

(※句頭の数字は点数を示しています)

「中山純子記念俳句賞」の終了について

中條睦子

「万象」創刊に大いに貢献され、初代同人会長を10年務められ同人会の基盤を築かれた中山純子師の功績を顕彰し制定された「中山純子記念俳句賞」は、第七回をもちまして終了とさせて頂きますことをお知らせいたします。

平成30年、故内海良太名誉主宰のご発案で企画された「中山純子記念俳句賞」は、令和元年の第一回は、44名の応募があり、同人の皆様の意欲と熱意に必要性が感じられ、続けてまいりました。

第一回は図らずも純子師の地元である金沢の中條睦子が受賞致しました。7回実施しました内の6回を北陸勢が占めるという結果は、故中山純子先生の地元として、大いなる励みとなりました。

しかし、第二回32名、第三回31名、第七回には18名と低迷の途をたどる結果となりました。

昨年、中山純子師の没後10年を迎え、それまで続けてまいりました中山純子忌も終了のピリオドを打ちました。

今年5月、江見主宰のご出席の許に開催された「万象」同人会幹事会で、議題として協議しました結果、同人の高齢化に伴うことでもあり、全会一致で終了が決定いたしました。

この間、毎年ご応募下さいました同人の皆様は心より感謝申し上げます。今後は「万象俳句賞」に多くご応募下さいますことを切にお願い申し上げます。

●中山純子記念俳句賞受賞作品

第一回	正賞	「待春」	中條睦子
	準賞	「熊撃ち」	豊田高子
	佳作	「果ての鳥」	江見悦子
第二回	正賞	「廃鉢の里」	塩井志津
	正賞	「富士有情」	曾根満
第三回	準賞	「えやみの冬」	岡本敬子
	佳作	「木偶屋敷」	福島吉見
	正賞	「牛角力」	豊田高子
第四回	佳作	「お四国の路」	村上和義
	特別賞	「よろずよ橋」	高橋ひろ
第五回	正賞	「明けの春」	成瀬真紀子
	佳作	「慰霊の旅」	村上和義
	佳作	「雪の声」	喜多尾明子
	特別賞	「土親し」	高橋ひろ
第六回	正賞	「藍の郷」	村上和義
	正賞	「初山河」	谷渡末枝
	佳作・特別賞	「古事」	高橋ひろ
	特別賞	「木星」	今越みち子
第七回	正賞	「白山に雪」	伊藤美音子
	正賞	「極月の水」	神田美穂子
	準賞	「白川郷」	成瀬真紀子
	佳作	「おぼほの花」	下嶽孝一
	特別賞	「初午」	今越みち子

佳句佳句しかじか

榎本文代

同人作品鑑賞(六月号)

斑雪野を樹液堰下げ子供たち 岡本敬子

「斑雪野」は春の雪解けの風景。この季節になると、白樺の木から樹液の採取がはじまる。採取できる期間は短い。樹液堰を下げて集まった子供達は、大人について白樺の林に入っていくのだろう。樹液堰の大きさや形などは想像できないが、子供達のわくわくしている気持が伝わってくる。採取した樹液の用途はいくつかあるようだが、煮詰めて作るシロップの甘さは格別である。

張りついてゐたのは墓石初蛙 高橋ひろ

お彼岸のお墓詣りに行かれて、目に触れたものをそのまま詠んでいる。しかし句からは「よりによって墓石にいるとは、冬眠から出て来たばかりというのに」と、蛙に語りかける作者の声が聞こえてきそうである。それは季語の「初蛙」が上五でなく下五に置かれたことで作者の視点が伝わってくるからだと思う。滑稽味も感じる。

足元の温もる日差し牡丹の芽 加藤季代

まだ早春の陽気が目まぐるしい中で作者は敏感に季節の変化をとらえている。背中を温めてくれた柔らかな日差しが足元にまで届くようになった。庭の牡丹が芽吹きはじめている。朱色の太く逞しい芽は、大地の温もりを感じさせてくれる。

歛置いて伸ばす背骨や山笑ふ 三屋英俊

春さきの田畑の耕しは今では殆ど機械化されたが、ここでは歛を使って打ち起こしている。老後の畑仕事を楽しんで丁寧に耕しているようにも思えるが、一歛一歛打ち込んで鋤き返すのは重労働である。時々は歛を置いて前かがみだった姿勢を伸ばすことになる。「背骨」が具体的に面白い。芽吹きの木々の緑は目にやさしい。「山笑ふ」の季語で眺望のひらける景になった。

道明寺のつぶつぶが好き桜餅 竹澤竹里

桜餅には関東風と関西風があるという。餡を小麦粉の薄皮で巻くのが関東風、道明寺粉を蒸して作るのが関西風である。道明寺粉は餅米を乾燥させて砕いたものでつぶつぶの食感がある。桜餅が店先に並ぶようになると、桜の蕾もふくらんでくる。

猫の恋総武本線ガード下 中嶋久登

総武本線は東京駅と銚子駅を結ぶJR線。沿線には、船橋、千葉、佐倉などがあり、ローカルな雰囲気を持っている。「ガード下」は作者の住む船橋近辺かもしれないが、どこでもよい。場所を特定しない方が想像もふくらむ。たまたま通りがかったガード下で、恋猫がうるさく鳴き合っていた。その声をかき消すかのように電車が通り過ぎて行った。総武本線の電車だった、と。

囀がさへづりを追ふ朝かな 砂地宏子

鶯のひと声があつて耳を澄ましていると、高い声を張った

り、複雑に鳴き続けたりと様々な声が聞こえて来る。鳥の名前は分らなくても、それぞれに主張があるようで楽しい。「囀」と「さへぐり」を組み合わせたリフレインが、すがすがしい朝の鳥の声を伝えている。

くくたちの晴れ晴れと雨浴びてをり 佐藤和子

「くくたち(茎立)」は、収穫が終わり畑に取り残されたものや、採種用のものなどの花茎が伸びたもの。畑にほったらかされたままである。乾いた土に音をたてて降り出した雨に、茎立のみどりも生き生きとして見える。「雨浴びてをり」の擬人化が効いて気持ちのよい句になった。

蠅生まる青き光の翅を持ち 大村峰子

蠅はもつとも嫌われている、うるさい昆虫である。「蠅生まる」は羽化のことで、蛹から成虫になって翅が生える。成虫で越冬した春の蠅とは違って、体は小さくても艶がある。明るい日差しの中で羽化した蠅の翅を「青き光」と詠んだ。いのちの輝きである。疎まれているものに向けられた作者の眼差しはあたたかい。

キリン舎へ春菜の籠を吊り上げる 成瀬真紀子

動物園では珍しい動物にたくさん出会えるが、檻の中の動物も多い。キリンは屋外で柵越しに見ることが出来るので、親しみやすく人気がある。餌の時間の「キリン舎」では、首の長いキリンのために大きな籠が吊り上げられていた。たっぷりと盛られた青菜が食べ尽くされると、子供達からは歓声が上がったことだろう。

荒る日やふつくらと煮る味噌の豆 北川 禮子

工場で大量生産される市販の味噌と違って、家庭で作る自家用の味噌は素朴な香りと味がする。かつては農家で作っているところが多かったが、発酵食品が見直されて手造りする人も増えている。地域によっては講習会が開かれ、お仲間が集まって楽しみながら作っているところもある。まず原料となる大豆を柔らかく煮ることから始まるので「味噌豆煮る」が季語。時間のかかる煮炊きは、家事の少ない天気の良い日の方がよい。たっぷりと手間をかけられるので、ふつくらと出来上がる。

木の芽風ばらして運ぶ手織機 谷 渡末枝

能登地震から二度目の春を迎えた。掲句のあとに〈終の家壊す決意をして暮春〉が載るので、大きな決断をされたことが窺える。機を織る音が聞こえてくる家から、ばらばらにされた織機がいてねいに運び出された。芽吹きはじめた木々を渡る風はやさしく、穏やかな日和だった。

鶴亀の色差し終ふる日永かな 渡真利真澄

「色差し」は「広辞苑」に「顔などの、色合い。色のぐあい。彩色。いろどり」とある。沖縄といえは紅型である。鶴と亀の図柄が鮮やかな色彩で描かれた、一筆一筆に力を込めて仕上げたためだいたい柄である。「日永」の中には日の長さだけでなく、春めいたゆとりのある感じが漂っている。鶴亀の彩りが整った安堵感が、季語の中に感じられる。

古き良き町

内田郁代

川六つ越えて青葉の丘へてふ
町川の細き流れや草茂る
剣豪の道場跡へ萩若葉
多羅葉の緑の小花日を隠す
花うばら十歩で渡る春雨橋
川岸の光あつめて桜の実
花馬酔木晶子の歌碑の道しるべ
万緑へ開け放ちたり戸定邸
薫風や葵の紋の釘隠
徳川の名残の屋敷清和かな



松戸は旧水戸街道下総第一番の宿場町。歴史も古く興味深い土地。駅からバスで十分余で、野菊の墓の碑へ。坂を下って程なく矢切の渡し。対岸には柴又帝釈天、駅周辺には、千葉周作旧居跡はじめ、神社、仏閣等宿場の名残が色濃い。

駅近くの小高い丘に、徳川慶喜の弟明武の旧居、戸定邸がある。国指定重要文化財でもあり、丘全体、非常に丁寧に美しく手入れされていて芝生の丘からは富士山も望める。千葉県万象俳句大会は5月8日、ここを吟行地に実施された。

火縄銃

草間三香子

五六粒含む外郎花の冷え
隴夜の杖曳く音のおぼつか
花の寺異人両手に守り受く
竹の子の出るらし四方罅はしる
潦揺るる日の斑や若楓
万葉の池の揺らぎや蝌蚪の紐
青き踏む稚の瞳の耀へり
県境の端突つ切つて恋の猫
張りぼての象のお練りや花まつり
梅東風や大地揺さ振る火縄銃

地域一帯「徳丸ヶ原」と呼ばれ、將軍家の鷹場、砲術の訓練場だった。後に、高島秋帆により西洋式砲術の訓練の場。明治以降は広大な田園地帯となる。
明治43年、高島秋帆の名に因み「高島平」となった。人口の増加に伴い活気づく反面、学校、幼稚園の不足、変化の激しい時期であった。近年、少子化の影響により、統廃合される学校もある。周囲に美術館、東京大仏、植物園があり、梅園の祭りには火縄銃の披露もあって、四季折々楽しむことが出来る。



芹の水

佐藤 和子

底浅き其角の井戸や椿落つ

伊勢原市のシンボルである大山を眺めながら日々を過ごす作者。阿夫利神社には、芭蕉の高弟だった其角の墓があるという。その墓前にある「其角の井戸」を詠んだ一句がこれ。「底浅き」が写生の妙で、季語の「椿落つ」から、辺りの静かな佇まいが感じられる。

白木蓮のみるみる開く日和かな

冬の終わりに綿毛に包まれた銀色の蕾をたくさん付けた「白木蓮」を見とめると、あのランプのような花が咲くのが待ち遠しくなる。そして季節が移ると、木は待ちかねたように花を咲かせてくれる。「みるみる開く」が実感である。

みなもとは雨降山よ芹の水

作品の題名となった一句。江戸時代の庶民の楽しみの一つに「大山詣り」があった。奈良時代からという真言宗の古刹は「雨降山大山寺」の山号寺号を持つもの。春になると麓の川べりには芹のみどりが美しく映えるのである。そうした川を流れる水は大山に端を発するのだと美しい叙景句。

頭が見えて櫻大樹の鴉の巣

春になって繁殖期を迎える鴉は、いつも以上に警戒心が強く、気も荒くなる。子育てをする「鴉の巣」が「櫻大樹」の若葉に紛れるような高みにあったという。果からは餌を待つひな鳥の小さな頭が見え隠れする。写生の句

螢狩

岡村 純子

春障子客間となりし母の部屋

「同人特別作品」への執筆を求められたこの機会に、先年亡くなられた母上への思いをまとめた作品。懐かしい思い出に繋がる品々を片づけて、今は「客間」として使われるようになった「母の部屋」には、障子越しに春の陽が射しこんでいる。

桐咲くや書込み多き母の辞書

作者と同じように読書がお好きだった母上である。形見となった「母の辞書」には、あちらこちらに書き込みがあるという。その筆跡を辿りながら、在りし日の面影を偲んでいるのである。「桐咲くや」の季語が亡き人の人柄を思わせる。

母逝きて片手寂しや螢狩

「螢狩」と題した作品には、母上と楽しんだ思い出を詠んだ句がいくつか並んだ。高齢の母上の手を引いて、ゆつくりと歩いた川辺の道である。最後となった螢狩を思いながらの「片手寂しや」は、読む者の胸をつまらせる。霜の夜や母は絵本を読みくれし
回想句である。作者の読書好きは、母上の絵本の読み聞かせに始まっていたことが分かる一句。母娘の間にある深い情愛を思わせる「霜の夜」のひと餉。「読みくれし」の措辞に得も言われぬ思いが籠っている。

愛しい我が子の心の中にいつもあって、こんなふうに俳句に詠まれた母上は、さそかし喜ばれていることだろう。

私のこの一句

故郷の河口越冬つばめかな 内田郁代

私の故郷は宮崎県延岡市。高千穂から降りてくる「五ヶ瀬川」と「大瀬川」という大きな川の河口に位置する。どちらも橋から魚影が見えるほどの清流で、鮎鱈が掛かり、釣舟なども浮かぶ。二つの川に挟まれた中洲に市の中心部があり、大きな橋が6本も架かる。嘗て若山牧水の通った延岡中学も近い。冬になると、高千穂風が吹きすさぶ石橋の橋脚辺りに丸々と太った燕が乱舞する。流れが急なので、危険だからと遊ばせてはもらえなかったが、河原ではよく遊んだ。長い句歴を刻む中、中心にある原点の句です。

筒鳥の鼓や昔分教場 大村峰子

ある朝、裏山から「ポポポポ、ポポポポ」とか「ポポッ、ポポッ」とか初めて耳にする鳥と思える啼き声が聞こえてきた。その声の主は「筒鳥」というカッコウ科の鳥だった。

啼き声が竹筒を叩くような音なので、筒鳥と呼ばれたことに由来しているという。しかし、私にはそれが、鼓を打って

いる音のように聞こえたのだ。

裏山への坂を少し登ると小学校があり、以前は分校と言われていた時代もあった。現在は、テニス・コートに……。

いつか又、あの鼓を聞きたいと思う。

白障子だけの明るさ蟄居の間 大内佐奈枝

水戸藩の九代藩主斉昭によって建てられた藩校・弘道館での作。早春には数百本の白梅紅梅が香を放ち、山菜羹も見事で辺り一面黄金色に染まる。

蟄居しているのは、第十五代將軍慶喜。江戸城明け渡しが決定的になると上野寛永寺を出て水戸に帰り、少年の頃学んだ弘道館の一室、至善堂にこもり、静岡へ移るまで謹慎した。

「一方だけに、白障子をめぐらせた部屋の暗さを、白障子だけの明るさ、といって逆に明るさで暗さを強調した」とは良太師の評。幕末の幕引きは、あれでよかったのだろうか。

〈新会員のご紹介〉

6月の加入者です。

竹村晃子様

東京都府中市（再入会されました）

第二十三回「万象」新人賞発表

第二十三回（令和六年度）「万象」新人賞は、

松永博子氏（静岡）が受賞と決まりました。

万象俳句会

受賞の言葉

この度は、「万象」新人賞という輝かしい賞をいただき大変光栄に存じます。これは、曾根満同人（新人賞第1回受賞）と小川明美同人（同第12回受賞）の熱心なご指導と、句友の皆様からの温かなご助言のお蔭です。また、「万象」誌上での選評にも常に励まされてまいりました。心よりお礼申し上げます。今後とも「即物具象の写生」を基本としつつ、自分らしい表現を求めて精進して参ります。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

略歴

昭和31年12月、静岡県静岡市生まれ。

令和4年の10月、故曾根満同人の満点会吟行に参加する中で初めて句会を体験。俳句の面白さを知る。

令和5年1月、「万象」に入会。また、小判草句会への参加開始。

まつながひろこ
松永博子氏

（東京）



第二十三回「万象」万象新人賞受賞作品

江見悦子選

松永博子 二十句

春めくや五百羅漢に夫の顔
白梅や聯隊址碑の旧字体
春寒や魚板の腹のささくれて
南風吹くぴくりと動く馬の耳
便箋を丸善に買ふ日永かな
薫風やごろりころ路地の猫
まくなぎに追はれ飛び石渡りけり
山法師谷照らしたるひとところ

宿坊の玻璃を流るる夏の雲
宵の夢紡ぎて烏瓜の花
護摩焚きを待ちたる腕に蚊のひとつ
太郎とぞ蠅虎に名づけたる
風神の背負ふ袋にいぼむしり
マリアめく石筍ひとつ水の秋
秋思かな告解室の格子窓
太刀魚や組板に尾の納らず
灯台の天女の風見秋高し
地を這ふや翅の欠けたる秋の蝶
冬紅葉茶室の壁の崩れをり
硝子戸に翅の透きたる冬の蠅

第二十三回「万象」新人賞の選考経過

今年度の新人賞の選考は、昨年度よりの新方式に基づいて進められた。

選考委員4名が推挙した候補者リストを、最終的に江見主宰が吟味して決定した内定者を選考委員会に諮り、受賞者決定までの作業は順調に終了した。

選考の手順は以下の通り。

- ① 主宰、編集人に加え、主宰が指名した選考委員（2名）が選考に当ることとなった。
- ② 事務局が候補者リスト（令和6年4月号から令和7年3月号までの「万象」誌入選句数などを記載。但し、既に同人となっている方及び同人推挙を辞退された方は除外）を作成し、推薦用紙と共に、選考委員に送付した。
- ③ 選考委員には、事務局資料と各自が収集した情報を吟味していただいたのち、3名以内の候補者を挙げて、推薦理由と共に、事務局に結果を報告していただいた。
- ④ 選考結果をもとに、事務局が「新人賞最終選考資料」を作成して主宰に伝達した。
- ⑤ その後、主宰が総合的判断をした受賞内定者を他の選考委員に通知し、諸否の回答を求め、その報告を受けて主宰が受賞者を最終決定した。

選考委員、事務局は以下の通り。

〈選考委員〉4名

江見 悦子 中村 千久 榎本 文代 神田美穂子
〈事務局〉2名
砂地 宏子 （中村千久）

選考の結果、第二十三回「万象」新人賞は
松永博子さん（静岡）に決定した。

選考基準としては、年間の入選句数、巻頭回数、将来性、句会や支部活動への関与の度合い、年齢などが考慮された。
更に選考委員からの推薦候補者リストを参照し、最終的に左記の3名が選考対象となった。

鈴木 隆久	（千 葉）	年間41句入選
村田由美子	（千 葉）	年間41句入選
松永 博子	（静 岡）	年間43句入選

選考委員から寄せられたコメント要旨は以下の通り。

鈴木 隆久

昨年の新人賞候補者。巻頭はまだ無いが4句選5回。写生を踏まえた作品にやわらかな感性が滲み出ている。類句類想感の無い独特な表現に魅力がある。句会活動にも積極的。

村田由美子

巻頭は無いが4句選5回。一昨年の「万象」賞3位、積極的に作句の幅を広げようとして

松永 博子

いる。新中央句会にも数少ない会員の一人として積極的に参加。生な言葉遣いが気になることもあるが、安易な方向に流れなければ、今後に期待が持てる。

四句選7回、11月号で巻頭と進境著しい。句歴は2年半と浅いが、それも新人賞にふさわしい。表現が的確で、俳諧味豊かなところも個性的である。年齢的にも今後の活躍が期待される。

選考委員の感想

これからに大きな期待

江見悦子

選考基準として、「年間を通しての作品の優秀さと安定性」「新人に相応しい実力と将来性」の2点がある。句会等への積極的な関与も勘案し、次の3名の方を候補者とした。

1位に松永博子さん。句歴は2年半と浅いが、故曽根満さんの指導の下、積極的に吟行句会等に参加し即物具象の写生を学んできた。的確な表現で17音を紡いでおり、俳諧味もある。年齢も若く、各種活動への参加に積極的でこれから期待できる人材である。

2位に村田由美子さん。一昨年の「万象賞」では佳作を受賞する等、積極的に句作の幅を広げようと努力している、新中央句会にも数少ない会員として参加し、意欲的である。作

品は平明で穏やか。心境の深まりによって今後の益々の活躍が期待される。

享年はゼロ歳墓参のビスケット

3位に鈴木隆久さん。やわらかな感性を持ち、句の世界が広い。社会性豊かな句への取組も新鮮である。自身の世界を大切にして句を詠もうとしている姿勢を評価したい。

観覧車風に新緑汲み上げる

最終的に松永博子さんが今年の新人賞を受賞した。力のある静岡のお仲間と一緒に、自分の俳句を磨いてください。

認識から抒情への昇華

中村千久

1位 松永博子

年間の4句選7回、うち3度の巻頭は群を抜いていた。安定感のある即物具象に基づく写生俳句の中に、独自の個性を発揮した作品が多く見られる。写生通じて得た詩因をしかりと捉えて、的確な言葉にして伝えようとする姿勢が好ましいものに映った。《春寒や魚板の腹のささくれて》《便箋を丸善に買ふ日永かな》《秋思かな告解室の格子窓》など、既に同人とするに十分な力量を感じさせる。

2位 村田由美子

3句までは揃うがその先いま一つといったことにもどかしさを感じていたが、今年度になって句境を開いたようだ。《摩尼車ひとりで回す彼岸かな》《里山に薪割る音や小六月》。安易な方向に流れずに、写生から得た実感を言葉に昇華することが今後の課題だろうと期待している。

3位 鈴木隆久

有力同人の揃う千葉県での研鑽の成果だろう。(日は西に影絵めきたる連根堀) (剪定の終りの音が暮れなづむ) など、即物具象に基づく写生、個性的な表現を求める姿勢が好ましい。句材を広く求め、これまでにない表現方法を試みることで新たな作品が生まれるように思う。

新しい風を

榎本文代

「万象」新人賞の選考にあたって届いた資料には4句入選者を対象とする旨が書かれてあった。まず入選者の年間作品のリストを作って7名の方に絞った。その中から推薦を決めた3名の方である。

1位は松永博子さん、(便箋を丸善に買ふ日永かな) (太郎とぞ蠅虎に名づけたる) (地を這ふや翅の欠けたる秋の蝶) 「万象」に入会して二年で、4句入選が巻頭3回を含めて7回ある。また万象俳句賞にも応募されている。積極的な姿勢からは句の勢いを感じる。多彩な趣味もあつて句材は広い。詩としての俳句を模索しているという方である。ぜひ「万象」に新しい風を吹き込んでほしい。

2位は鈴木隆久さん、(寒禽の地を啄みて地へこぼす) (剪定の終りの音が暮れなづむ) (母在りし日のこと薄れ後の月) 作品に滲み出る感性が魅力である。これからも独自の表現を磨いていってほしい。

3位は長谷川はるみさん、(初場所の番まだ結へぬ力士かな) (股割の力士はひとり秋の朝) 欠詠にマイナス点をつけ

たが、力士を詠んだ類想感のない句と(くれないの風を孕めり箒草)の詩的な感性に惹かれた。

選考にあたり

神田美穂子

松永博子さん新人賞受賞おめでとうございます。今後のご活躍を楽しみにしています。願わくば、同じ静岡市で句会活動をしているので、句座を共にする機会が出来たらと思っています。

23回目の新人賞の選考にあたり、過去の新人賞受賞者を同人会名簿を開き、初めて確認してみました。ダブル受賞もあるので29人の受賞者のうち、残念なことに4名の方が亡くなられ、退会者も少なくなかったのは驚きでした。

今回の選考の基準としては、受賞者には長く「万象」で活躍して欲しいという気持から、年齢を確認、また地域の指導者や代表者の評価を聞き、次の3名に注目しました。

1位には金沢の松田好子さん。句材の幅が広く俳句らしい俳句ではないところが好ましい。2位は那覇の辺野喜宝来さん。俳句に対する姿勢がとても真面目で底力がある。3位には柏の村田由美子さん一昨年の万象賞では会員ながら3位。

新中央句会に出席し力をつけている。3名とも決して年齢が若いという訳ではありませんが、俳句実作以外の句会活動においても、各指導者や代表者からは皆良い評価を得ておられる方々です。年間の成績もよく、万象賞へ挑戦し、それなりの評価を受けていることを確かめ、3名の方を推薦致しました。

【選考委員の目に留まった最終選考候補者の作品】

鈴木 隆久

気泡抱く明治の硝子小春風
剪定の終りの音が暮れなづむ
引き波に残りし泡や春愁
室外機うなるビル裏蟻の列
黙読の昏動く夜長かな

村田由美子

英字紙に包むバーガー街に春
鬼ごっこ一抜け二抜け春夕焼
床上げの窓に眩しき山法師
黒雲のみるみる育ちスコール来
享年はゼロ歳墓参のビスケット

松田 好子

黄落や大樹の裾をつむじかせ
無造作な熊の箱罌木下闇
曝涼や古文書の字のみな掠れ

辺野喜宝来

花甘蔗風て夕べの雨しづく
首里坂の風音変はる立夏かな
満天の星の重さや黒葡萄

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 8月号

特集

戦後80年

俳句の力、文章の力

- 戦争俳句セレクション 名取里美
- 著書を読む 上野啓祐 永田浩三
- 近作戦争本の読書感想 今泉康弘 篠崎央子
- 私にとつての戦争／戦後世代が考える 坂本宮尾 宮崎斗士 柳元佑太

タラシ 俳句界NOW すずき巴里

特集 序文／言祝ぎの言葉

- 序文とは何か 筑紫磐井
- 忘れられない「序文」 高野ムツオ
- 松尾隆信 武藤紀子 藤田直子
- 序文に込めた思い 柴田多鶴子
- 本井英 田島和生
- 井上康明 松岡隆子

隔月連載



若手句集 を読む④

相子智恵
抜井諒一
堀田季何
(司会) 井上泰至

【注目の句集】 橋田憲明『橋田憲明句集』

連載陣

宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄

一流退者11名！
充実の投稿欄



※一部変更の可能性があります。
株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

北から南から

糸取りの里

福井 中村 優

福井県若狭出身の直木賞作家水上勉氏の作品に「湖の琴」がある。若狭から滋賀県の余呉湖の南、賤ヶ岳の麓にある生糸製造農家へ奉公に来た娘・さくが、そこで働く同じく若狭出身の男衆・宇吉とめぐり合う。運命の糸にもてあそばされる二人の、哀しみと詩情をこめて描かれた悲しい恋の物語である。1966年に佐久間良子の主演で映画化された。

賤ヶ岳山麓では昔から「伊香具糸」という生糸が生産されている。繭をときほぐして数本を合わせた糸は、白く艶やかな美しさだけでなく強靱な特性から琴、琵琶、三味線などの和楽器の弦に使われた。この伝統は現在も継承されている。

昨夏のことになるが、万象敦賀のメンバーで「糸取りの里」を吟行した。琵琶湖と余呉湖に挟まれた自然豊かな山里である。滋賀県長浜市木之本町伊香具地区の大音という所にその工房があった。

高温の湯の中に繭を浮かべて繊維をほどき、藁の箒で糸の先端を取り出し、これを数本まとめて一本の生糸とし、巻き取る「座繰」という技法を見せていただいた。

琴線の閑かな里は麦の秋 倉谷ます美
座繰機を十指巧みに糸取女 鶴田勝子
繭一つ千メートルの糸を吐く 中川雅月

糸引女 手口八丁 賤ヶ岳 為永香月枝
繭踊る素早く手繰る聡き指 川口和代
繭を煮て糸口もとむ稽箒 中村 優
大音に紡がれてきた歴史に触れたひとときだった。

伊香具神社を参拝した後、北国街道の木之本宿を訪ねた。木之本は宿場町として、また木之本本地蔵の門前町として栄えた。落ち着いたたたずまいの町並には醤油醸造元、造り酒屋、旧本陣など歴史的、文化的遺産が数多く残り、現在も昔ながらの商家の家並が抒情を誘っている。

ユツカ咲く寺に蓮如を偲ぶ石 倉谷ます美
薬屋の古き看板梅雨じめり 鶴田勝子
舟板塀夏至の陽反す蔵通 中川雅月
つばくらめ巣くふ蔵元大福帳 為永香月枝
菖蒲田に揺るる葉の音地蔵坂 川口和代
風死すや「無」の文字託す地蔵尊 中村 優

毎月2回実施している句会で詠まれたそれぞれの句を掲載した。ぜひ北国街道木之本宿や水上勉氏のふるさと福井県若狭地方を訪ねていただきたい。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にゴンベン（言）の付く漢字を入れてみましょう。

- 1 彼一□我一□秋深みかも 高濱虚子
- 2 出番待つ馬□し合ふ村芝居 桂 信子
- 3 愛蔵す東籬の□あり菊枕 杉田久女
- 4 ひし餅のひし形は□が思ひなる 細見綾子
- 5 日本がここに集る初□ 山口誓子
- 6 端居して□稽古や指拍子 森 澄雄
- 7 □□と抒情の間に豆を打つ 内海良太
- 8 星涼しアンデルセンの童□など 星野麥丘人
- 9 夫見舞ひ来し一事のみ初日□ 石田あき子
- 10 虹に□す妻よりほかに女知らず 中村草田男
- 11 鶯菜名前よければ妻に□ふ 飛高隆夫
- 12 安兵衛の□ち入りしたる日なりけり 角川春樹

【正解】

- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 1 語 | 2 話 | 3 詩 | 4 誰 |
| 5 詣 | 6 謡 | 7 認識 | 8 話 |
| 9 記 | 10 謝 | 11 言 | 12 討 |

おいしい俳句

第6回 嵐山光三郎

まゝごとの飯もおさいも土筆かな 星野立字

星野立字は虚子の次女として明治三十六年（一九〇三）に生まれた。兄の高濱年尾・弟の池内友次郎など、みな腕ききの俳句作者となつたが、虚子は「句作を私のほうから勧めたのは、立字一人である」と記している。大正十五年（一九二六）二十二歳のとき、父の勧めで作つた最初の一句「立字が目にしたのは、小さな男の子が独りで、玄関の敷居に箱の蓋を置き、俎板として遊んでいる姿だつた。目に入つた景色を「ありのまま叙してみた」と自註に記している。ひかえめに、句を詠んだ情景を述べているが、そう言われると、虚子ならず誰もが「凄い……」と舌を巻く。「ありのまま」を写生することは、プロの俳人が苦勞してきたことである。男の子が俎板の上に土筆を置いて、きざんでいた。土筆の頭のつぶつぶがご飯である。土筆の香りが、匂のなかにたちのぼる春である。おかずは茎ですね。

頭で考えても詠めない。「小事件」を瞬時にドラマとしてとらえている。私の世代は、敗戦直後に育ち、食うものがないので原っぱに生えている野蒜や酸模・土筆・路の茎をつんで食べた。麦の芽をくちやくちや噛んでいるとガムになりました。

子規と私(七)

細見綾子

四、五年前、中国へ行ったとき、私、俳人だから、せめて中国にある花を描いてきたいと思って、旅の荷は減らして減らして、スケッチブックと鉛筆を持って行ったんですけど、行ったら何とものがっかりしました。その花がないんです。描きたいような花がなかったんです。夾竹桃ばかりでして、八月の終わりに行ったら白い夾竹桃が多くて、北京の町を歩いても上海の町を歩いても、どうしてあんなに夾竹桃が多いのか不思議なくらいで、スケッチブックに描けるような花はなかった。

北京に故宮というのがございますね。故宮は、いろんな皇帝が後宮にきれいな女の人をたくさん住まわせたところで、牡丹があると聞いていたんです。で、その牡丹見たいなあと思って行ったら、牡丹は短くて、あんまりいい花じゃない。大陸はああいふうに乾燥しているから、あんな花しか咲かないのかなあ、こんなのなんの魅力もないわ、と思って描きませんでした。

薊も咲いていましたけど、描かなかったです。ただ、魯迅の墓へ行きましたら泰山木がありました。物凄く大きな泰山木です。それだけは良かったなあと思っただけ、あんまり高いから描けなかった。中国にも、もったいい花があるといわれるだろうけど、日本のような草花というか花の美しいところはありません。

私は花が好きだから、日本によくぞ生まれたなんて感謝してるんです。そう思っ、私はスケッチブックに一つも花は描かないで帰りました。

ただ、北京の故宮に行ったとき、燕がふわあつと飛んでいて、日本の燕を思い出して懐かしく思いました。私は、日本の燕と比較しながら、あはまだ燕がいる、奇縁だなあと思いました。故宮にいても、日本のことを忘れていないんですね。それじゃあつまらないなあ、わざわざ北京へ来て燕を詠まなくても日本の燕を詠めばいいんだから、故宮にいて日本との違いとか日本の良さを発見するようなものでした。それほど、日本がいいということになりますね。

私は、年とともに日本の風土は美しいなあと思います。私たちの国では、ただ、花が咲くだけじゃなくて、春夏秋冬が来る。そして、今年の秋は去年の秋とは違う。今年はまた新しい秋が来て、また冬が来れば春になり花が咲く。花は、去年の花と違う、そういう感じがするんです。だから、楽しいっていうか、その不思議なことを、俳句することによって、そういう感じが一層私にします。

私はいつも、今日は何だかつまらしいと思って暮らすけれども、明日はまた違う日が来るんだなあ、そう思っています。同じ日は二度とは決して来ない。明日は違う日が来る。また、実際そうなんです。そう思っ、実人生をこつこつと歩いて行く。まだ歩き足りないのか生きていますけれども、実人生というのをとても私は大事にしています。(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②④

橋本 清

陸奥の 真野の草原まののく かやほら

遠けども 面影にして 見ゆといふものを

(三・三九六)

「於母影」(明治三年)は、明治の新体詩に大きな影響を与えた訳詩集です。森鷗外ら新声社の同人によるもので、鷗外が選出したゲーテ、ハイネ、バイロンなどの西洋の詩が中心になっています。巻頭にはこの歌が掲げられ、書名の由来を語っています。遠い異国の地もこの詩集を読めば、目の前に面影となつて浮かんでくるだろうということでしょう。

その中の一編、「ミニヨンの歌」は、ゲーテの小説「ウイルヘルム・マイスターの修業時代」に出てくる詩です。

レモンの木は花さきくらき林の中に

こがね色したる柑子は枝もたわ、にみのり

青く晴れし空よりしづやかに風吹き

ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く

くもにそびえて立てる国をしるやかなたへ

君と共にゆかまし

少女ミニヨンがウイルヘルムに歌って聞かせたもので、レモン・オレンジ・青空・そよ風・ミルテ・月桂樹と、南

国の風物を列挙して、かの地への憧れを歌い、ウイルヘルムの心を遠いイタリアへ誘おうとしているのです。

数あるゲーテの作品の中からこの詩を選んだ鷗外の趣味に興味を覚えます。遠く離れたものへの憧れが人の胸に甘美な気分を呼び覚ます。鷗外はそこに抒情詩のテーマの一つを見出したのです。それは笠女郎の歌に見出される詩情に通じ、長い間、日本人の心の中に潜んでいたものです。それが鷗外によって再発見されたのです。

上田敏の『海潮音』(明治三十八年)は、日本の近代詩の発展に大きく寄与した訳詩集。巻頭の「燕の歌」は、イタリアの作家ダンヌンチオの詩を訳したものです。その冒頭の三行に、遠い異郷への憧れが歌われています。こういう詩を巻頭に置いた敏の趣味にも興味を覚えるものです。

弥生ついたち、はつ燕、

海のあなたの静けき国の
便もてきぬ、うれしき文を。

笠女郎は表題歌の次に、今度は直喩を用いてはつきりと思いのたけを訴えています。

奥山の 岩本菅を 根深めて

結びし心 忘れかねつも

(三・三九七)

「奥山の岩の根元に生えている菅。それが根を深くおろしているように、心で深く結ばれたのだから、あなたのことはもう忘れようにも忘れられませんか。」



電話とルピナス

武蔵村山 松井宣夫

日本でも人気の絵本作家であり園芸家として活躍したターシャ・テューダー（1915～2008）は著書の中で電話機を発明したベルについて記しています。

19世紀ボストンの名門（先祖は16世紀のばら戦争の勝者）で育ったターシャは幼き頃ベルに直接聞いた話があったそうです。ベルは、「講演や発明を売り込む際、ボケットにルピナスの種を入れ、沿線ごとに種を蒔き、全米をルピナスの花畑にしたい」と語ったそうです。

百年以上が過ぎ、ベルの通過した沿

線には花畑が続いています。日本では原種の半分ほどのサイズに改良された鈴が春に出回っています。電話とルピナスは、何の関係も無さそうですが、俳句でいう取合せですね。

電話

静岡 藤本節子

暑ければ用なき電話子の家へ

川崎俊子

母は父の死後、弟家族と住んでいたが、私へ頻繁に電話をかけてくるようになった。特別用事があるわけもなく、私の声が聞きたくて、数分の話で「またね」と電話は終わる。もうその声も聞けないが、ふとした瞬間に母の声が耳の底に蘇ってくる。

訊きかへす梅雨の電話のなほ遠し

林 翔

時として電話の声が聞き取りにくいことがある。ましてや梅雨時の声は、くぐもりがちで尚更である。

電話は開口一番、声のトーンで相手の表情が浮かぶ。また正直に喜怒哀楽

も伝達してくれる。同級生ともこれらは安否確認は電話でと決めた。久しぶりに幼馴染に電話してみよう。

電話と現代社会

宮崎 中山 宣

昨今の台風は以前にもまして強力で竜巻を連れてくるようになりました。今迄以上の激しさ故に危険防止のため毎回ホテルに避難している有様です。一昨年の台風後も3階の大屋根の棟板金が強風でお隣の庭に飛んで行き肝を冷やしました。

屋根の修理から半年後、詐欺の電話がかかってきました。心配のあまり対策を電話会社に依頼しましたが、台風の被害で電話が機能せず、解決まで二日間もかかりました。

最近の電話回線はインターネットを初め、固定電話、携帯電話と複雑になっています。不具合が一つ起きると全ての機能に影響が及ぶようです。電話は現代社会の複雑さの象徴のように思われてなりません。

昭和の電話

青梅 横井一美

社会人なりたての頃は勤務先の電話を取るのが苦手でした。頑張つて聞いているつもりでもなかなか聞き取れないのです。聞こえたふりも出来ないし本当に苦手でした。特に営業部の先輩女性の声は聞き取れませんでした。

当時の価値観では女の人は少し高くて小さい声がよしとされていたような気がします。今から考えると変なのですが、聞き取りにくいなんて仕事向きではありませんよね。そんな風に思っていたのは私だけなのでしょう。それから50年、今はメールの時代ですね。どちらがよいのかわかりませんが。

姉妹の長電話

金沢 清水英理子

我が家の固定電話は常時留守番電話になっています。迷惑電話が多いのと、親戚や友人、知人との連絡はスマホのLINEメールや電話で十分なためで

す。淋しさはあるものの、これも時代の流れと言えます。

便利な便利なLINE電話の相手は名古屋市内に住む3歳上の姉です。何事にも積極的な姉は姑に続いて連れ添いも亡くした今も、充実した独り暮らしをしています。

スーパの冷めない距離に娘の家族が住み、私には理想の生活のように見えます。それでも姉とは月に何度か電話で話をします。近況報告や健康、家族のことですが、話していると一時間余りの長電話になってしまうこともあります。お互い後期高齢者となり、金沢と名古屋を行き来するの面倒なため、安否確認を兼ねた姉妹の長電話はこれからも続きそうです。

五月雨るる切るに切れない長電話

電話からスマホへ

札幌 八代洋子

19世紀にアレクサンダー・グラハム・ベルが電話を発明しました。日本に入つたのは1890年。東京と横浜

の間で初めて電話サービスが行われたと言われています。

我が家に電話がついたのは50年程前だと思います。それまでは近所の家や公衆電話を利用したものでした。最近では携帯電話が普及し、公衆電話も徐々に減り、見かけることが少なくなりました。

この度、私も老人ホームに入所し、携帯電話からスマホに替えましたが、高齢の私には中々覚えるのが大変で、指導役の息子に叱られながら頑張っています。便利さがかえって私には不便に思われる今日この頃です。

「万象ノオト」投稿募集

▽12月号「駅」(8月末日締切)

▽1月号「車」(9月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

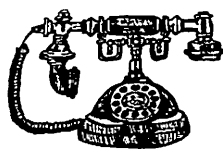
▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

雨浴びし白木蓮の銹極む 松山 入河大河

○ぼつちやりと島の子育つ桃の花

つくつくし一夜の雨に太りたる

づかづかと屋根を踏みゆく春の雷

○肩の荷を柳に掛けてけふひと日 市川 奥澤よし江

風鈴の一つ鳴りをり石畳

青梅を映す瞳の瑞々し

山門の朝の湿りに夏の蝶

飛花落花鐘撞く僧を包みたり 静岡 松永博子

山影の寄せ墓に蜂うなりたり

桜蕊をんなの髪にひとつ降る

○裸婦像の荒きへら跡草いされ

川音に暮れゆく暮春和紙の村 金沢 井端久子

○茶屋街の人波を縫ひつばくらめ

蓮如忌や小暗き葉茶屋奥灯す

逝く春や潮の香ふつと無人駅

○風わたる躑躅の丘を肩車 茅ヶ崎 久保田富士子

飄飄とハンカチの花白ばかり

山桜桃一粒摘めば牛の鳴く

大山のくつきり晴れて鯉幟

山笑ふ講釈長き陶芸家 新潟 齋藤 信

住む人の替はりし庭の花みづき

○山間のラジオ途切れる蕨探

薫風や雁木通りの古柱

葉桜の影濃くしつつ隅田川 東京 長谷川はるみ

ひこばえの次々萌ゆる古木かな

○幽霊坂下る師の墓青楓

花の色見せて躑躅の蕾かな

公園を一人ジョギング風薫る 札幌 石田 睦

蒼き空雪溪映ゆる積丹岳

常緑の木々の間に八重桜

○まつさらな白衣医学部新入生 島崎 洋

室蘭の工場夜景朧かな

木道の分かつ湿原水芭蕉

はなやかなひこばえ桜の切株に 杉山和廣

南から花の便りや木々疼く

いつせいに風を誘つて桜散る

お日様に背中抱かれて春うらら 杉山鈴子

子よ癒えよ桜の闇を抜け出でよ

お日様へつつん伸ぶる土筆かな

蝶二つもつれもつれて高みへと 札幌 園田鶴子

せせらぎや千島桜の紅かすか

母の日や仏飯白く炊き上がる

黄水仙日当りの良き駅舎かな

墓地の背の山一面の桜かな

格子塀に沿ひにぎやかにチューリップ

キー叩くネイルの指や初桜

春の田の星の過ぐるを待つ夜明け

ふらここの少女の膝の小犬かな

囀や客もまばらな喫茶店

動画読み込めぬ卯の花くたしかな

露地物のアスパラ添へてハムエッグ

花冷や寝床に猫の潜り来る

郊外の球場開き風光る

首筋の心許なき更衣

桜舞ひピンクに染まる道渡る

鯉のぼりビルのすき間を悠々と

童謡のメロディうかぶチューリップ

笑ひなき一人暮しや春惜しむ

○一陣の風に乱るる花筏

竹重富子

田邊政代

土門一平

土門一

船橋明美

八代洋子

神木に遊ぶすずめや夏隣

まほろばの大枝ゆるる糸桜 新庄 曾野部礼子

大鳥居くぐりて聞こゆ花の声

朝な夕なお代りしたりばつけ味噌

朴の木※ばつけ……東北地方の方言でふきのとうのことの蕾の固く静もれり 大江 安藤桂花

遅咲きの大山桜風の中

ましろなる吾妻石楠花山深く

水輪二つ子雀浴ぶるにはたづみ 仙台 富田洋子

宿坊の堀を染めたる花筏

ペット塚に小さき首輪や新樹光

小糠雨香りうするる沈丁花 燕 渡辺志ま

永き日や眠気の来る針仕事

○若楓四阿に席ゆづり合ひ

桜葉降りて生まるる葉風かな 新潟 山田季聰

虹立ちて梢の小鳥朗らかに

磯遊最初の一步に吾子すくむ

散る桜五橋を下る屋形船 榊原キヨ子

若緑元刑務所の小さき門

錆色に残る椿や昼深き

むくむくの犬もゆつくり花の土堤 斎藤ヨシ

お花見や近所の餅屋皆廃業

先代を思ふ屋敷の桜かな

黒光る車の屋根へよなほこり 新潟 佐藤幸示

路の莖はや二番手と田舎より

本落つる音に目覚むる春うらら

廃校の水たまりへと飛花落花 芳賀 稲川清子

○門前に田植のテント設へり

仏間まで香りただよふ木の芽和

地を叩き二重跳びの子蝶の昼 福武幸子

地藏堂の菩薩にひらく大牡丹

キャンパスに新樹真つ直ぐ連なりぬ

ぜんまいの開ききつたる山路かな 鹿沼 渡辺利子

静もれる五重塔や夏木立

野薊に見られてすべるすべり台

土砂降りを凌ぎこでまりほろほと 栃木 飯塚キミ

初燕ぽんと靴跳ぶ逆上がり

麦の秋不足の切手貼る葉書

みどりの日揃ひて向かふ夫の墓 佐野 木村君子

軒先を染むる大輪薔薇香る

持ち回る緑の羽根の募金箱

つつじ燃ゆ靴紐ぎゆつと山頂へ 佐野 仲山さよ子

潜りては息つき泳ぐ子亀かな

鯉幟川の水面を群れ泳ぐ
城址の土塁撫でゆく涅槃西風 酒々井 小林あけみ

弁財天の風穴深し花卯木

花過ぎの畦のひび割れ乾くま

岩に立つ観音像を蛇伝ふ

参道に沿ふせせらぎや花いばら

一文字も読めぬ碑春落葉

物忘れ夫と楽しみ散る桜 佐倉 新谷八郎

義本美智江

揚羽蝶飛んで止まつて葉草苑

菜園も流行のありて苺の香

スマホ見る女の笑みや春爛漫

志木 汐見克彦

早苗届き賑はふ棚田海の風

日溜りに席取りをする新社員

手を入れて棘の痛さよ木瓜の花

杉田富美代

のどけしや富士の絵見あげ一番湯

門の前吹き溜まりたる杉の花

建て替へし軒に戸惑ふ初燕

雨降りて春の山火事収まりぬ

森山洋之助

乳飲み子の眠りの続く春障子

鳥帰る飛行機雲の消ゆる先

鈴木隆久

朽ちかけの幹に目覚めの柿若葉

象の背に天上天下花祭

良太師の声する桜吹雪かな

新座 多田英治

空襲展見て大川の桜かな

○春生さんの春蘭盛り五十年

鈴木美根子

武蔵野の林の緑鳥の声

鉄棒の子らさかさまに見る桜

○權の手を休めて仰ぐ桜かな

千葉 高田みや子

純喫茶のビロードの椅子昭和の日

轟きて年度末告ぐ春の雷

梵鐘に山門くぐる八重桜

米田敏子

梅東風や積ん読本を入れ換ふる

花冷や老いてさみしき膝頭

新茶淹れ昔話に戻りけり

高田みや子

○新入生次々光るランドセル

新樹光土蔵カフエに射し込めり

入り彼岸夫の墓をお参りす 船橋 近藤澄子

風鈴のすずやかな音昼下り

目の前をとんでゆきたる糸とんぼ

三人目の家族は窓の守宮かな

蠅はるす 蠅虎の又来る

羽ばたけり子供育てし鳳蝶

夏来るリズムはメリーゴーランド

切株のゆるめる朝や春の雨

行儀よく蒸籠に並ぶ柏餅

花びらの小さき震へ犬ふぐり

春の雷空を二三度遊びけり

曇天を押し上げてゆく森若葉

俯ける吾を過るや夏の蝶

グランドの金網越しの蛇苺

昼顔の咲きたるままに日の暮るる

菜の花や社に人の影のなく

黒板消しきれいに洗ひ卒業す

鶯の初音の尖る森の中

たんぽぽの絮のまんまる六地藏

真つ白な躑躅垣なり葬の家

どこまでも広がる水輪鵪の一羽

船橋

山口秀吉

柏

鹿毛満子

村田由美子

松戸

石川幸子

菊岡緋路

寿多映子

走り根に寄り添ふごとく花莖

紫木蓮日を織り込みて色深む

夕方の路地のミモザの明るめり

〇絡まりてもんどりうつや鯉幟

咲き終へて名札外れし牡丹園

初夏やネモフィラの丘続きたる

名物の銀座あんぱん臍に花

上野山隅田の土手の花の舞

花筵夫婦にこにご掃いてをり

義弟去り朧月夜や三回忌

咲きはこる母の形見の君子蘭

花吹雪川面に散りて儚けれ

夢語る野球少年風光る

空ま青棚田にそよと余花の風

柿若葉行つて来ますの声高し

空晴れてラインに流れ太き虹

鳥帰る上へ下へと屋形船

マヌルネコ上目遣ひに梅雨の闇

髪形をほめ合ふ二人仏生会

こどもの日父と子食ぶるホットドック

松戸

渡部洋子

東京

安藤美酒々

大場八朗

蕪木静子

北口富栄

齊藤孝夫

高野翠子

今朝の夏目覚し時計電池切れ

点滴につながれてをり外は初夏

東京

鶴田智美

病室の窓を飛行機夏の雲

ジャスミンの散つて香りを残したり

雨がちの空を生き生き今年竹

青天やスワンボートのペダル音

西郷像見守るやうに梯梧燃ゆ

雨あがり杉葉ばかりの目立ちるて

春あらし癒えし我が身の心地よき

膝ついて銘酒差し入れ花筵

園児らの群れて間をとる花祭

ざんばらの髪の翁や栗の花

石堀の裾に傾く鼓草

二の鳥居までは石段村祭

曇天に明るさを増す朱の牡丹

葉桜やからだでしやべる生徒たち

筍をざくざく入れて炊きあぐる

進級や恥ぢらひながらボンジュール

春うらら厚焼卵のパンかじり

夏日受け若者集ふ立飲み屋

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

馬場美智子

平子甲奈

平澤一宏

帯固く背筋をぴんと給着る

幼稚園寂しく垂るる鯉幟

曇天にひとつばたごの白き花

東京

宮崎正義

ふるさとのたよりは春の水没林

日溜りに掠鳥太る卯月かな

漆黒の式部の歌碑に花の雨

調布

荒井仁

春川に遅れて歩む京の街

○スカートの輪をゆがませて春の波

小海線桜吹雪の中に着く

惜春の海へ灯こぼす吊り灯籠

三鷹

高尾早弓

宵闇に祭太鼓の鳴り出せり

先触れの太鼓の地鳴り夏祭

花冷や髪を短く切り揃へ

南場雅子

桜吹雪道に溜まりて河となり

色のなき街にピンクの桜かな

笠雲に明日を占ふ五月富士

府中

竹村晃子

燕来る河原の工事昼休み

半眼の羽虫が掴む烏麦

○更衣簞笥の隅のナフタリン

武蔵

松井宣夫

朝採りと売子の声や松葉独活

去るものも来るものもあり初燕

役引きて風蘭吊し読書かな 日野 松原悦子

老鶯のなほ朗々と不動尊

盲導犬連れたる夫婦桐の花

春めきて猫の夜遊び長くなり 青梅 横井一美

花大根無人駅舎のフェンス越し

賑やかに法事の帰り桜五分

花吹雪シャッター街に舞ひ込めり 横浜 大駒泰子

チューリップ雨に花びら閉づるまま

夕間暮れ色深くなる藤の花

こどもの日父に抱かれて泣き相撲

○初夏や白さ眩しき波頭

青蔦や古木の幹を覆ひたる

幼子の枝垂桜に手を伸ばす

山女焼く煙のいぶす太き梁

菊五郎の大看板や風薫る

雉鳩の冬青空をおりたちぬ

どこからとなく集ひたり寒雀

飛びうつる庇の音や寒鴉

紫雲英田に三角ベースの跡しるき

岡 元枝

坂本 具子

柴田 雅春

長野 高朋

雪洞に黒髪ゆたか内裏雛

降るままに溶けて流るる春の雪

ままごとのシートの上に落花かな 横浜 豊 美佐子

杖ついて桜見おろす丘に立つ

桜咲くビルの谷間に喫茶店

介護士の胸の豊かに聖五月 川崎 横山ユキ子

菖蒲湯を掻き混ざる子の手の赤し

○更衣して丸き背のシルエット

なやらひの果てて勤行鳩群るる 伊勢原 山本カツ子

夏めくや山くつきりと天を突く

病みし間にはかに変はる山みどり

○風の谷色のおふるるチューリップ 松田 古谷悠紀子

ホルンの音響く丹沢山開き

頂におどろに昇る野藤かな

地藏尊まで満天星の花抜けて 静岡 飯田優子

桜薬ふる三毛猫の四肢にふる

墳丘の風に従ふはこべぐさ

春日遅遅神社へ坂の長さかな

狍犬の阿の口に降る花一片

青梅や脹れつ面の十二歳

伊東 文恵

斑雪雲間をそびえ磐梯山

静岡

海野俊彦

○病む膝へ見舞のメール花の昼

鳩群るる居心地のよき姥桜

春雷に隣の猫の飛び込み来

静岡

筑地裕子

春灯黒く蠢く濠の鯉

晴れやかやたつたひとりの入学式

樨の木の爪跡三筋山笑ふ

杉田義則

茶刈機に乗り鶯の初音かな

大和路の蛙合戦陵の濠

内藤允昭

上向いて流れ寄りたり落椿

静かなる湯気は母の香豆御飯

杉山千鶴子

白梅の表札の文字隠したる

○カーテンが大きく膨れ夏兆す

中澤祐一

病人を励ます嘘や白椿

昨夜の雨溜まりて花の屑埋む

鳥の鳴く彼方見遣りて青き踏む

杉山巳代

枝折戸を押せば牡丹密やかに

確かめて下る石段初音かな

永田公香

行く春や墓の湯呑みに葉の浮きて

鞭打たれ眼見開く競べ馬

花舞へる宮にかすかな水の音

高井明子

鶯の四方より鳴くや古墳山

長政の寄進の仏苔の花

野崎浩子

蒼天へ初子のたぐる風合戦

夕闇や香り濃くなる栗の花

歟二本漬けられ池の水温む

高橋一夫

新緑の山ひとまはり太りたる

戦前の墓地の広さよ筆の花

長谷川洋子

昭和の日凱旋橋の残りたる

廃屋をすつぱり覆ふ藤の花

松が枝に声零す鳥水温む

田中秀幸

演壇に提灯点し廿日会祭

句作りの縁に花舞ふ妻の留守

豆の花蔓を遊ばせ香を放つ

矢野喜久江

流鶯や木立の中の美術館

金沢 菅原雅子

春昼や飛び交ふ鴉鳴き交はす

松原の土やはらかく松露搔く

金沢

春の朝学生服の猛ダツシユ

焼津

小梁洋子

川岸のまだ棘もたぬ野のあざみ

湯通しの海のまみどり新和布

田上ナツ子

来し方をしめし思ふ花の下

掛川

鈴木美由紀

夕風にさざ波の立つ代田かな

掛川

鈴木美由紀

面会の父と眺むる山若葉

夕餉にと貰ふ日の香と干鰯

廣田宏美

斎場を囲ふ卯の花野辺送り

傾げ立つ鬢のはつれや古雛

廣田宏美

○改札の列を眼下に夏つばめ

四日市

藤原善明

雪形の崩れさうなる余震かな

手折り来し山茱萸一枝色増せる

松田好子

春暑し入場ゲートの列長く

金沢

上野富貴子

春の風邪喉滑りゆく豆腐かな

金沢

上野富貴子

故郷を離るる覚悟辛夷咲く

燃ゆるごとき躑躅のいだく石仏

宮崎恵美

校庭に残る一本桃の花

香ゆかしき大山蓮華壺に咲き

宮崎恵美

幼子の小さき手にて田植かな

北野陽子

花は葉に毎日通る道々に

俱利伽羅の棚田をわたる若葉風

かほく

能任康子

母の日の母に会へたり面会日

紅梅のふふむや早も目白来て

能任康子

木の芽ゆるび縮れ葉となる朝かな

アルバムに時を忘れて雛納

白山

朝倉みゆき

○のどにふはり朝一番の冷奴

花片のちらちら舞ふや利休梅

白山

朝倉みゆき

犬は犬同士立夏のドッグラ

朝掘りの筍届き頬緩む

白山

朝倉みゆき

藤椅子のきしきし鳴るも子守唄

○良太師逝き望む白山雪解風 白山 鶴尾正江

湖に映ゆ入り日に染まる山桜
土筆生ふせせらぎの音さらさらと

○山葵田に跼めば瀬音ひろがれり 敦賀 川口和代

石仏の並ぶ山路や落椿

木の芽和句をのがさず友来る

○朧夜のページにはさむ朧かな 徳島 林 早苗

店閉ざす駐車場跡草青む

チューリップ園幾万の色極む

置物の蛙の上に土蛙 山本晴美

半世紀の友とグラスを交はす春

窓ごしに愛でし桜の葉桜に

寝ころびて春の雲追ふ河川敷 山本瑤子

青空へ土手の菜の花続きをり

土落とし春大根をかじりけり

街川に八十八夜の潮満ちて 小松島 田上幸子

矢の如く水田飛ぶ影夏つばめ

耳回り剃り上げし子や夏隣

○遠浅の波にもまれし桜貝 福岡 園田清子

登校や野原の蕨廻り来て

春日傘忘れてありし公民館

桃色に赤子誕生春の虹 福岡 鶴田輝代

目を凝らす薬草苑の芽立ちかな

青空に恥ぢらふやうに花楓

青空へ香のふくいくと枝垂梅 太宰府 美山留唯

いつの間に無人の駅舎竈ぐもり

古処山の煙のやうな杉花粉

○カフェラテのハートの模様月おほる 那珂川 高山ひさ子

裏年と言はれ筍噛みしむる

撫で牛に長き行列楠若葉

○丘を蹴り空へ飛び出す半仙戯 門川 請関ゆかり

拝殿の裏の石塔苔青し

竹の皮落つるや静かなる御堂

指先を黒くつくしの袴取る 国富 山口孝治

ボンネットの上にひらりと散るさくら

ボール蹴る子らの掛け声春休み 那覇 稲嶺有晃

吟遊の雨の山路や春落葉

○終点は岬あざみの白満てり

ときをりは句碑へ激しく春の雨

清明の空の真青や海は風 那 大城末治

首里曙いそひよどりの鳴き渡る

青葉雨古窯の窯の閉ぢしまま

林道の亀にかまけて日永かな

花時計十時のままに春惜しむ

通り雨そのまま晴れてアマリリス

小桜の塔へ小さき鯉 沖繩 高嶺容道

海開く慰霊の丘や若葉雨

図書室の硬き木椅子へ若夏来

○うりずん南風袋小路の井戸御願 宜野 頭

海人の軒の明るき水字貝

花梯梧オランダ人の髪紅し 宜野 頭

春の夜踊る女の赤きシャツ 森尾 舞

二分咲きの桜の淡し運河端

子ら居らぬ校舎のしんと花の雨

万象基金のご報告

匿名 五口

(令和7年6月6日～6月30日)
「万象」の発展のため、大切にに使わせて頂きます。

万象俳句会

俳句

8月号
予告

7月25日発売

巻頭作品50句 高野ムツオ

作品21句 奥坂まや・中原道夫

予価1,300円(本体1,182円)®

特集

昭和100年 戦後80年

昭和のモノを詠んだ句・
体現する句

特別
寄稿

林浩平

歌仙としての「おくのほそ道」
——安東次男の読みかたを問う

短期集中論考

堀切実

「物仕立てについて」
史的に考える(上)

付録

季寄せを兼ねた

俳句手帖 秋

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発行 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

帯坂に山車押す脛の力瘤

夏祭の頃になると、市ヶ谷駅から職場に向かう靖國通りの道筋に笛の音が聞こえる。赤坂にある日枝神社の夏祭「山王祭」に合わせて、九段の町の夏祭が行われるのだ。

麹町へと広がる「番町」と呼ばれる町は、徳川家康が江戸に入府したときに始まるものだ。尾根筋と谷筋が続く起伏の多い地形が特徴的だ。

「帯坂」は市ヶ谷駅近くにある細い坂である。江戸時代の有名な怪談『番町皿屋敷』に登場するお菊が、髪振り乱し帯を引き摺りながら逃げたところから付けられたものだというのが、当のお菊はお家に伝わる大切な皿を割ったために手討ちとなり、井戸に投げ込まれたという話だから、この由来はどうも眉唾ものである。掲句はその帯坂を登ってゆく山車を、その後ろから見てのものだ。山車の前に付けられた綱には子どもたちが取りついて引つ張り、坂に来ると法被に半股引姿のいなせな男衆たちが後ろから力一杯に押して上がるのである。その時の白足袋を履いた毛脛の筋肉の動きを見ていたら、「脛の力瘤」という言葉がふと浮かんだ。山車の上にはひとときわ姿のいい男衆が坐って、表情を変えることもなく横笛を見事に吹き続けていた。（祭笛吹くとき男佳かりける）という橋本多佳子の句が思い出された。

* ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

令和八年版俳人協会編「俳句カレンダー」

内 容 表紙 表紙とも十三枚綴り壁掛用
表紙 上田五千石

藤田直子・行方克巳・角谷昌子・松岡隆子・今井 聖
小川軽舟・村上喜代子・辻恵美子・岸本尚毅・徳田千鶴子
河原地英武・石田郷子・今瀬一博・小澤 實・野中英介
谷口智行・染谷秀雄・片山由美子

（掲載月順）表紙を含み五四一句掲載（ジュニアの俳句十二句掲載）
「万象」からは江見悦子・中村千久・前田貴美子・中條睦子の句を掲載

送 額 1部 1200円
1部 900円／2部1260円／
3部 1310円（郵便料金）

4部以上については実費（宅配便）
発送予定 10月上旬より（俳人協会から直送されます）

申込先 〒113-0021 東京都文京区本駒込6-15-14-206 桑原優美子
電話 080-15485-11626
メール Yumiko98@icloud.com

発送先の住所・氏名・電話番号・申込部数を明記のこと

申込締切 令和7年9月5日

※なるべくグループでまとめてお申込み下さい。
※発送先が数カ所になる場合は、それぞれ列記してください。

※後日、代金と送料を請求しますので、左記に送金願います。
○ゆうちょ銀行より振込の方

ゆうちょ銀行「記号」10150【番号】11568581（通常預金）
○他の金融機関より振込の方

振込先 ゆうちょ銀行「店名」018ゼロイチハチ
【口座番号】1156858（普通預金）
【口座名義】砂地宏子（スナジヒロコ）

万象作品の佳句

江見悦子

ぼつちやりと島の子育つ桃の花 松山 入河大河

「島の子」は、大河さんの住む瀬戸内海の子供たち。

「桃の花」との取合せが何とも良い。男の子でも、女の子でも、どちらもふさわしい。海の日を浴び、波に戯れて育つ島の子である。桃の花が実をつけ、「ぼつちやりと」豊かに育っていく姿が想像される。文句なく明るく、未来を感じさせる句となった。

肩の荷を柳に掛けてけふひと日 市川 奥澤よし江

「柳」が春の季語。春一番に芽吹く柳は水辺に美しい緑をなびかせ、その艶なる姿から浮世絵の美人画に配されてきた。そんな柳に掛けた肩の荷は、それほど重い荷ではなかったのかもしれないが、やはり気が重い。しかしいったん身から離れたことで、気持ちよく今日の一日を送れるという安堵感が生まれた。たおやかな柳に肩の荷を預けるといふ、意外性の感じられる句に魅力を感じた。

裸婦像の荒きへら跡草いきれ 静岡 松永博子

季語「草いきれ」から、この裸婦像は屋外の草原に置かれていることが分かる。塑像なのだろう、近づくといへら跡が残る、裸婦像を仕上げた彫刻家の熱い思いを感じた作者。息苦しいほどの草いきれの中で、作者は命を掻き立てられて

いるようだ。動詞を使わず力強い句となった。

茶屋街の人波を縫ひつばくらめ 金沢 井端久子

茶屋街とあれば金沢、大切に住みなしている昔ながらの家屋には毎年燕がやって来るのだろう。人混みの中を飛び交うつばめの姿には驚かされるが、伝統ある茶屋街のたたずまいとつばめを歓迎する金沢人の優しさに心惹かれる。

風わたる 躑躅の丘を肩車 茅ヶ崎 久保田宮十子

丘一面、躑躅が鮮やかに咲き誇っている。吹き渡る風が気持ち良い。子供を肩車した若い父親が、丘をゆつくりと登っていく。「肩車」という一語で、情景が鮮明に浮かぶ。省略の効いた爽やかな一句となった。

山間のラジオ途切るる 蕨採 新潟 齋藤 信

ラジオを聞きながら蕨採に歩いている途中、急にラジオが聞こえなくなった。電波の届かない山の中、自分だけの秘密の場所に行き着くには随分と山中を歩く必要があるのだろう。蕨は山からの贈り物なのだ。

幽霊坂下る 師の墓青嵐 東京 長谷川はるみ

「師」とは、はるみさんが小松川句会で長い間指導を受けた内藤恵子さん。昨年10月31日に亡くなった内藤さんの墓所については、南雲秀子さんが6月号で詳しく紹介している。「幽霊坂」という坂の名が独特だ。風が万緑をゆるがす中、幽霊坂を下ってお墓へと向かう。恵子さんはどんなお顔でお弟子さんたちを迎えたのだろうか。

一陣の風に乱るる花筏 札幌 八代洋子

花筏を流れの中で詠むのではなく、風に乱れる様で詠んだ。「一陣の風」に吹かれて、一瞬姿を変えた花筏に意外な美しさを発見した作者。桜は季節ごとに我々を楽しませてくれる。

若楓 四阿に席ゆづり合ひ 蕪 渡辺志ま

瑞々しい若楓に囲まれた四阿は、休むに恰好な場所にあつて、皆が一休み。席を譲り合つて静かに銘々が楽しんでいる。良い時間を戴いた嬉しさ。

門前に田植のテント設へり 芳賀 稲川清子

昔ながらの結いを作つて行ふ田植の準備だろう。集落の人達が集まつて門前にテントを張り渡している。「しつらへり」という言葉に、この日の田植を大切に思う気持ち表現されている。親類縁者や知人もやってきて手伝う、祭りのようなにぎやかな田植である。

春生さんの春蘭盛り五十年 新座 多田英治

「春生さん」は山田春生先生、亡くなられてもう3年近くになる。多田さんは50年前に山田先生から「春蘭」を分けてもらったのだ。春蘭は山野に自生する蘭で山男の山田先生が大事にしていたもの。多田さんの家で株分けをされ半世紀を重ねた春蘭は今年も花盛り。山田先生を偲ぶ一句である。

絡まりてもんどりうつや鯉轡 東京 安藤美酒々

大空の風の中を連なつて泳いでいた鯉轡が、隣同士ふつと絡まつたかと思うともんどりうつた。一瞬の動きを言い留めた一句。「もんどりうつ」が面白い。

更衣箆筒の隅のナフタリン 露村 松井宣夫

誰にでも覚えがある光景を詠んだ。衣替えをしようと箆筒の引き出しを空にしたなら、隅に古いナフタリンが散らばり中身はすっかり空っぽになっていた、という句。一読、ナフタリンの匂いが鼻を衝いた。こんなことも句になる。

スカートの輪をゆがませて春の波 調布 荒井 仁

面白い場面を詠んだ。女性が長いスカートのまま春の海に入ったのだろう。波にスカートの裾が広がった様を「輪をゆがませて」と表現したところが手柄。

病む膝へ見舞のメール花の昼 静岡 田中秀幸

膝を悪くしている作者の元へメールが届いた。内容は膝の病へのお見舞。メールが「病む膝」に届いた、と言っているのが面白い。季語「花の昼」に、快癒を確信する気持ちがある。俳味もある明るい句。

改札の列を眼下に夏燕 四市 藤原善明

転勤した藤原さんから、久しぶりに届いた句。「眼下に」とあるので、夏燕の目になって駅の改札口を俯瞰している。いつもは見上げられる燕だが、ここでは反対に燕が見下ろしている面白さがある。藤原さんは津地方気象台に勤務し、南海トラフ地震について「NHK歴史探偵」で解説したこともある専門家。今後時間を作つて投句を続けて下さい。

丘を跳び空へ飛び出す半仙戯 門川 請閑ゆかり

「半仙戯」は春の季語でぶらんこのこと。丘の上のぶらんこを全力で漕いだその先は天空、「跳び」「飛び出す」の思い切つたりフレイインが、気宇壮大な句を生んだ。

新中央句会報 (5月例会)

令和7年5月25日(日) 東京文化会館

(出席19名)

江見 悦子 主宰選

水切つて散らす日のきら夏燕 三屋 英俊

ぼつぽつとひがな零るるえこの花 内田 郁代

軽鬼の子の親鳥の水脈はみ出さず 一由久美子

レジ待ちの少年の手にカーネーション 小池 清晴

嫩葉まで吸ひ上げられし地の湿り 中村 千久

池底に日の斑の揺るる立夏かな 下 嶽 孝一

その奥にしづけさ棲みぬ五月間 中村 千久

沼揺れて何かあるらしきつばた 下 嶽 孝一

山法師木陰に本の忘れもの 村田由美子

木道にさへづりおとす落羽松 下 嶽 孝一

走り梅雨庭を横切る白鼻心 小池 清晴

④ 薔薇園の土やはらかく篩はれて 一由久美子

⑤ 薔薇園の土やはらかく篩はれて 一由久美子

薔薇園に来て、薔薇の根元に施す土を丁寧^{まづ}に篩^{ふる}っている園

丁に目を留めた作者。美しい薔薇を咲かせるにふさわしい、やわらかな土である。薔薇の世話をする園丁の仕事ぶりに共感した作者は、直接薔薇を詠まずに土を詠んで、薔薇園の世界を描き出している。「篩はれて」の連用形止めが優しい。

ぼつぽつとひがな零るるえこの花 内田 郁代

星の形をした純白のえこの花は、一つ一つが時に思い出したように散る。そんな有り様を「ひがな零るる」と捉えた一句。眼前の景に見入っている作者の姿が見える。平仮名表記も成功した。

嫩葉まで吸ひ上げられし地の湿り 中村 千久

漢和辞典によれば、「嫩」は「女性のようにしなやか、柔軟でわかい意味」とある。わか葉の下を歩いて地の湿りを実感した作者は、この湿りが幹の中心を上って嫩葉を茂らせ、その美しさを支えていると思った。視点が下から上へと移っていくことで、見えない水の流れを想像させ、個性的な句となった。

走り梅雨庭を横切る白鼻心 小池 清晴

白鼻心は、額から鼻筋にかけて走る白い帯から名が付いた雑食性の哺乳類。畑作物、果樹などを食べる害獣と見なされることもあり、都会でも屋根裏に棲みついて人間を悩ませた

りしている。この句、目撃した情景をそのまま詠んだものだ。

中村 千久 選

水切つて散らす日のきら夏燕	三屋 英俊
鳥語降る朝樂しきアマリリス	江見 悦子
鏡涼しあれこれ鞆持ち替へて	吉中 愛子
軽兎の子の親鳥の水脈はみ出さず	一由久 美子
青嵐雁 金紋の扉を放つ	江見 悦子
レジ待ちの少年の手にカーネーション	小池 清晴
池底に日の斑の揺るる立夏かな	下 嶽 孝 一
沼揺れて何かあるらしきつばた	下 嶽 孝 一
ガラスの昇降機降下走り梅雨	星野 信子
青田風 錠前錆びし水車小屋	塗木 翠雲
リュック背負ひ少し斜めに夏帽子	安藤 美酒々
④ 歩を止めよピアニッシモの若葉風	砂地 宏子

④ 歩を止めよピアニッシモの若葉風 砂地 宏子

上五の「歩を止めよ」が大胆な出だし。寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」(1967年刊)がすぐに思い浮かんだ。この命令形の答が中七下五にある。立ち止まって、「ピアニ

ッシモ」の符号が似合うような若葉を揺らす幽かな音に耳を澄ませと。

沼揺れて何かあるらしきつばた 下 嶽 孝 一

手入れもされていない「かきつばた」が咲く隠沼である。濁った水面が揺れたのは、そこに住む魚が動いたと思うのが普通だが、この作者はそれを「何かあるらし」と詠んでみせた。得体の知れない生き物が潜むようなこの思わせぶりの表現で、読み手の想像はいやが上にも膨らむのである。

青田風 錠前錆びし水車小屋 塗木 翠雲

青田を渡る風の中に見た古い水車小屋は、今はもう使われることもなく静かにそこにある。作者はその扉に、これもまた使われることなく錆びついている「錠前」を目に留めた。清々しい「青田風」と、錠前の赤茶色の対比が心憎い。「俳句実作のための即物具象の写生」を実践した一句がここにある。

塗木 翠雲 選

水切つて散らす日のきら夏燕 三屋 英俊
漆喰の壁へ薨へ風あをし 中村 千久
④ 青嶺 広げ葉桜の句を読み返す 村田由美子

歩を止めよピアニッシモの若葉風 砂地 宏子

刃を差せば瀬戸の潮ふく黒めばる 吉中 愛子

鳥語降る朝樂しきアマリス 江見 悦子

軽暖や句会場には良太無く 村田由美子

さみどりの刺やはらかし山椒の芽 久留島 規子

芍薬の真白や妣の誕生日 内田 郁代

山法師木陰に本の忘れもの 村田由美子

木道に交すあいさつ風薫る 長谷川 信也

⑧ レジ待ちの少年の手にカーネーション 小池 清晴

⑨ レジ待ちの少年の手にカーネーション 小池 清晴

テレビやラジオ、あるいはインターネット空間に殺伐とした情報が沢山流れている昨今にあつて、この句はなんとも暖かい。こんな句に出会えたことが大変嬉しい。少年は何色のカーネーションを手を持っていたのだろうか？ 母の日に母と少年の間に、どんな言葉が交わされたのだろうか？ 想像が一気に膨らんで幸せな気持ちになりました。

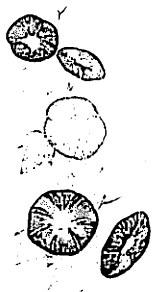
「青嶺」広げ葉桜の句を読み返す 村田由美子

1月に逝去された、故内海良太名替主宰の句集「青嶺」を何度も読み返して、故人を偲んでいる句。句集中に〈葉桜と

なるまで母を引き止むる〉とあり、若き日の故名替主宰が母へ寄せる思いのこもった句に作者も感動している。同じ作者に〈軽暖や句会場には良太無く〉の句があり、良太さんを俳句の師と仰ぐ私にとっても忘れられない句となりました。

鳥語降る朝樂しきアマリス 江見 悦子

江戸時代後期に原種に近いものが渡来したとされるヒガンバナ科の「アマリス」。球根から舌状の葉が叢生し茎の頂きにユリに似た大きな花が咲く。目覚めた朝の庭に鳥の囀を聞き取った。それを「鳥語降る」と捉えて、なんとも楽しい一日の予感が走ったのだろう。リズムを整えて楽しい句になりました。



今後の新中央句会の予定

▽8月31日(日) 大妻学院(千代田区三番町)

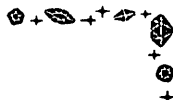
G棟411室

▽9月28日(日) 東京文化会館中会議室1

13時より
13時より



ルビーの小函 (8月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 4 家刀自 (いえとじ)
古裂 (こぎれ)
- 7 嫩葉 (わかば)
病葉 (わくらば)
六義園 (りくぎえん)
氷島 (ひょうとう) *アイランド
燕子花 (かきつばた)
- 8 空木 (うつぎ)
甘藍 (かんらん)
梅檀の花 (せんだんのはな)
- 9 経師屋 (きょうじや)
- 11 裔 (すえ)
華奢 (きゃしゃ)
千木 (ちぎ)
- 12 海霧 (じり)
隠沼 (こもりぬ)
- 13 言祝ぎ (ことほぎ)
- 15 復習ふ (さう)
褶曲 (しゅうきよく)
水草生ふ (みくさおう)
- 17 鰯 (するめ)
玩ばれし (もてあそばれし)
茅 (ちがや)
- 18 四葩 (よひら)
- 19 札の森 (ただすのもり)
臼杵 (うすき) *大分県の地名
- 20 礪白 (ひきうす)
- 21 産土 (うぶすな)
- 22 灰汁 (あく)
海芋 (かいう)
- 23 罅 (ひび)
- 24 過れる (よぎれる)

- 25 激つ (たぎつ)
榛の花 (はんのはな)
今日庵 (こんにちあん)
山嶺 (さんてん)
煮沸 (しゃぶつ)
- 26 傍 (そば)
一掬 (いっきく)
- 27 九十九折 (つづらおり)
黙 (もだ)
早苗饗 (さなぶり)
霜れる (つちふれる)
寄居虫 (やどかり)
化儉 (えびね)
接木 (つぎき)
- 28 外に (とに)
- 36 花馬酔木 (はなあせび)
- 37 外郎 (ういろう)
潦 (にわたずみ)
- 52 山桜桃 (ゆすらうめ)
- 55 碑 (いしぶみ)
- 56 鳳蝶 (あげはちょう)
蒸籠 (せいろう)
- 57 梯梧 (でいご)
- 58 紫雲英田 (げんげだ)
雪洞 (ほんぼり)
満天星の花 (どうだんのはな)
枝折戸 (しおりど)
廿日会祭 (はつかえさい)
- 60 榲子 (れんじ)
- 61 跼めば (かがめば)
霜ぐもり (よなぐもり)
古処山 (こしよさん) *福岡県の山
- 62 水字貝 (すいじがい)

北 南 西 東

消 息 等

故内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「たかな」6月号に

水濁し出刃研ぐ黙や年の市 悦子

「初蝶」6月号に

松過やいつもの角をランドセル 悦子

「俳星会」71号に

あしひきの裾なめらかに初筑波 良太

外来の窓口閉す十三夜 悦子

六畳が宇宙や子規の机凍て 悦子

カフェ開く築地の交差点師走 悦子

「俳句界」6月号「全国の秀句コレクション」に岡本敏子さんの句

地球儀の海を廻せば春兆す

「俳句界」6月号レポート④「台北俳句会」創立55周年記念句会（3月9日開催）に徳島

島の「なると」主宰・福島せいぎ氏参加

春の水ごぼごぼ鳴りて走りだす

花換祭俳句大会（令和7年4月）万象敦賀

兼題 嶺南ケーブルネットワーク社長賞

笑む巫女にはにかむ男の子花換ふる

川口和代

俳人協会福井県支部紙上句会（4月30日）

選者特選

茜さす国引きの嶺鳥帰る 霞田勝子

高点评

身の幅に春の雪揺く煙の背 倉谷ます美

郵船に消ゆるトラック綱縋おぼろ 倉谷ます美

乳離れの仔牛の鼻輪春ささす 中村 優

春季福井県総合俳句勝山大会（5月11日）

兼題 選者特選

春の虹紙飛行機の添ふて飛ぶ 中村恵理子

席題 選者高点评

学舎は恐竜学部青山河 霞田勝子

つつじまつり鯖江市俳句大会（5月17日）

兼題 選者特選 鯖江商工会議所会頭賞

雪吊りの解かれし松の自在かな 為永香月枝

兼題 選者特選

玉掛けのクレーンの黙や春寒し 中川雅月

第3回俳人協会神奈川県支部総会・俳句大会

（5月29日 於 湘南台文化センター）

安田のぶこ 選

菜の花や軍士まなかひの吾妻山 久保田富士子

山田真砂年 選

垂らしおく蛇口の滴真夜の雪 大久保進

太田土男 選

銭湯も再開されしと花便り 柳澤宗正

山西雅子 選

風そよぐ苔の跡や大ふぐり 柳澤宗正

浦和句会「六義園吟行句会」

5月18日、江見主宰、久留島規子さん、

一由久美子さんにお出でいただき、六義園

での吟行句会を行った。参加者は吟行句3

句＋当季雑詠の5句、欠席者は事前投句

2句の計41句の出句。当日の吟行は老翁の

声や夏蝶を愛でながら池を巡る小旅行のよ

うでした。（砂地宏子）

滝音の三種水分石に来て 悦子

老翁のこゑが道連れ六義園 千久

老翁や碓の険しき峠道 規子

笹群るる朽根の陰に梅雨茸 久美子

葉桜の影の生まるる葉のそよぎ 優美子

青歯染を濡らし流れの速まりぬ 紀子

六義園森の涼しき風吹けり 宏子

第7回盛岡国際俳句大会 事前投句募集

投句料 2句 千円

投句締切 令和7年9月1日

詳しくはホームページ参照

（報・編集部）

939-0364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽「万象」令和6年10月号で、滝沢伊代次師の写生を再評価してくれた坂西涼太氏が、「文学の森」の「山本健吉評論賞」準賞を受賞された。「糾える縄―玉木愛子の愛と俳」と題する評論で、ハンセン氏病に冒されながらも俳句とともに生き続けた玉木愛子を発掘してくれた。〈目をささげ手足をささげ降誕祭〉などに触れ、自分の俳句が恥ずかしくなった。

▽令和の米騒動。新大臣の一声から備蓄米が安価に入手できるようになりましたが、新米の出回るシーズンを迎えてどうなるのでしょうか。備蓄米ではありませんが、今（6月）我が家ではカリフォルニア米を頂いています。家の評判も悪くはありません。

全国俳句大会の申込み、大会作品の投句締切日が迫っています。お忘れなき様、お願いいたします。（規子）

▽静岡の「季節風」では6月6日に吟行会を行った。例年であれば白子漁で賑わう用宗港も当日は不漁で出漁な

し。早桃の産地の長田地区では20軒ほどの農家が出荷の時期を迎えていた。安倍川の河川敷からは五月富士が遠く望めた。梅雨入り前の清々しい吟行日和の一日だった。（美穂子）

▽在職中は、8月中頃の一週間が旅に出るチャンスだった。補習・研修・合宿等々を縫ってだが。冬休みや春休みは短すぎて無理な海外旅行も楽しめた。ただ、何処へ行っても暑い。中国では「何でわざわざこんな時に。北京なら9月ですよ」とガイドさんに言われた。だが、温暖化の進む昨今、あの時の旅で暑さへの耐性が？（宏子）

▽5年前に江戸川区にある盆栽美術館を訪ねた時、園丁さんからさつきの苗木をいただき、我が家の庭に植えた。その後、すくすく育ち80センチの高さになり、今年は次々と花を咲かせた。よく見ると八重咲であった。昨年まで気づかなかったのが不思議だが、街の沿道によくあるさつきと思ひ込み、たかを括っていたのだ。何とも恥ずかしい限りである。（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万 象 八月号

第二十四巻 第五号

通巻 第二八一号

令和七年八月一日 発行

主 宰 江 見 悦 子

発行人 江 見 悦 子

編集人 中 村 千 久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-31-6 603

万 象 発 行 所

☎〇三六三三・四一五七九六

令和7年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日

令和7年10月27日(月)

午前11時(午前10時30分より受付開始)～午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-32668101 17

「交通」JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会

総会・中山純子記念俳句賞表彰 他

全国俳句大会

◆表彰 万象俳句賞
◆披露 万象新人賞

◆披露 令和7年度新同人

大会入選作品(特選句には選者染筆贈呈)

申込み費

一万三千円(昼食代を含む)
8月20日(水)までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行(記号)11300(番号)22149281(通常貯金)

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行(店名)098(口座番号)2214928(普通預金)

口座名義 コイケキヨハル ☎03-3681-5900

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会(希望者による二次会)を予定しています。

大会作品募集

作品 一人4句まで(1-3句でも投句可)

「万象」誌(7月号)巻末綴じ込みの投句用紙をご使用ください。(110円切手を貼ってください)

無料 *締切 8月15日(金)

投句先

〒165-0022 東京都中野区江古田4-12-11 一由久美子 ☎090-4746-8632

令和7年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子
実行委員長 中村千久
実行委員長 中條睦子

令和7年度「万象」同人会総会